

# 【完結】アーロン帝国建 国記（仮）

あきすて

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

アーロン編にのみ焦点を当てたお話。

# 目次

1話	1
2話	22
3話	42
4話	62
5話	73
6話	85
7話	96
8話	118
9話	141
最終話	162



## 1話

「シャーハツハツハツ！ ご機嫌麗しゆう、くだらねえ人間どもよ」

ここは東の海、コノミ諸島、ココヤシ村。

馬鹿みたいな笑い声を上げたアーロンが両手を広げ、集まったココヤシ村の住民に向かって一方的な要求を告げている。

その要求を簡潔に言えば、

【殺されたく無ければ金を払え】

と言った、ヤクザも真つ青の暴論だ。

少しはオブラートに包んで「治めてやるから税金を払え」位に言ってやれば、あるいは反発を抑えられ………って二重の意味で無理か。

俺は一步下がった立ち位置で溜息を吐いた。

アーロン一味で最年少の俺ことシユヴァは、前世の記憶らしきものを持ってこの世界に生まれ落ちた。

だから、この先に待ち受けるアーロンの運命は破滅の一言だと知っている。

出来る事なら漫画に描かれていた様な展開は、アーロンの為にも、村人の為にも、そ

して俺自身の為にも避けたいところなんだよな。

しかし、未だ幼く10歳の俺には、物理的にも思想的にもアーロンを止めるだけの力は無い。

さて、どうしたものか？

アーロン一味による傍若無人な振る舞いを眺めながら、俺は自身の生い立ちを思い返した。



俺という存在を言葉で表すなら、中途半端で歪な存在だろう。

シャボンディ諸島と呼ばれる地で、人間の母と魚人の父との間に生まれた俺は人間ではなく、かといって魚人でもない、半魚人と揶揄される種族だ。

違う世界で生きた記憶を思い出していた3歳頃には、自身がこの世界でたった一人の異物だと思っていた。

確たる一個人としての、連続した生涯の記憶でないのも悪かった。

どこか臍気で断片的な記憶。

幼い頃は今よりも発達した文明社会で生きていたはずが、大人の頃には今よりも野蛮

な世界で生きていたとか意味がわからない記憶。

年老いた頃の記憶がないのは、きつと早死にしたからだと思うが、肝心な部分が虫食いの様に抜け落ちていて、自分が誰だったのか名前すら定かじやない記憶。

この中途半端な記憶は俺に知識を与えてくれたけど弊害も多い。

前世を思い出した事で日本語ベースで物事を考える様になり、ソレに併せてポロツと口にしてしまう日本語を気にした俺は、基本的に喋らなくなった。

喋らないから言葉が身に付かない。

身に付かないから喋らない。

悪循環だったけど、仕方が無かった。

半漁人というだけで色眼鏡で見られるのに、変な言葉を口走るとか噂でもされてしまえば、シャボンディでは暮らせなくなる。

母さんを含めて誰とも話さなくなった俺は、この世界の言葉を覚えるのが他の子供達より遅くなった。

前世の記憶が有りながら、言葉の面では普通の子供に劣るとか……なにやってんだと自分に言いたい。

この記憶の中の一つに、この世界を描いたと思われる漫画、ワンピースがあった。

記憶の中の俺はコミックスだけでなく、週間連載が載ったジャンプを買うほどワン

ピースが大好きだった。

その割に、何故かコミックスにして10巻程度しか読んだ記憶がない。

いよいよこれからグランドラインに入るというタイミングで、前世の俺は飽きたのだろうか？

読まなくなった理由はよく分からないが、随分と後になってハチやアールンに出会い、この世界がワンピースと類似した世界だと認識した時はビックリしたもんだ。

だつてそうだろ？

大好きだった冒険活劇として描かれるワンピースの世界で、奴隷や差別がまかり通っているなんて、誰が想像できるんだ。

差別される側に生まれたからこそ言える……………この世界は腐ってる、と。

それはさておき、前世の記憶を思い出した俺は、身体は子供でありながら思考だけが変に大人びた。

どこか人を見下したような態度の、無口で生意気な半魚人のガキの完成というわけだ。

俺が幼少期を過ごした地域には、前世で言うところの託児所のようなしつかりとしたモノは無かった。

それに代わる物として、子を持つ親が公園に集まって子供達を遊ばせ、それを親達が



互いに協力して見守る仕組みがあった。

そこを俺達親子も利用していたのだが、中身が普通じゃない俺が、周囲の子供達の輪に入っていないはず孤立したのはある意味で当然だった。

子供達の中で孤立する姿を見た母さんがいつも申し訳なさそうにしていたのが、逆に申し訳なかつたな。

海に出て帰って来ない父の分まで、女手一つで昼も夜も働き俺を育てる母さんに、感謝はしていたし尊敬もしていた。

しかし、この頃の俺はどうしても母さんを実の母とは思えなかつた。

これも前世の弊害だったのだろう。

別に母さんが嫌いだったわけじゃない。

ただ、どこの誰ともわからない記憶を持つ俺なんかが、多くの人を殺めた記憶を持つ俺なんかが、母さんを実の母と思って良いのか戸惑っていたんだ。

どう接したら良いのか分からなかつた。

俺に出来ることは、迷惑を掛けない様に良い子として振る舞うくらい……そう思っていたのに、それさえも出来ていなかった。

そして、これが根本的に間違っていたと知ったのは、母さんと過ごした最後の日の事だった。



俺が6歳になった頃だ。

退屈だけど平凡で、母親が居るだけで幸せだった日々。

それがある事件をきっかけに予告なく終わりを告げた。

どこかの馬鹿が聖地マリージョアに襲撃をかけ、手当たり次第に奴隷を解放するといふ事件が起きる。

一見良いことに見えるこの奴隷解放行為は、裏で新たな悲劇を産んだ。

奴隷を失った天竜人と呼ばれるゴミ共が、失った奴隷を取り戻すのは当然として、それまでの間に合わせとして新たな奴隷を求めたのだ。

【天竜人が金に糸目を付けずに奴隷を買い漁っている】

まことしやかにこんな噂が流れ、それを信じたクズ共が俺を攫いにやってきた。

俺の魚人としての特徴は背中になしかなない。

一見すると人間にしか見えない。

それが逆にレアものとして高値になる。

そんな噂が街中に溢れた。

いや、そんな噂を公園に集う母親達が広めたのだ。

俺は背中の特徴を隠す為、母さんが作ってくれた空のリュックを常に背負っていた。大きくなつても使える様にと、幼い俺には不釣り合いな程に大きなりュック。

そのリュックと長く伸ばした髪で背中が隠され、見た目では半魚だと判るはずもない俺の正体を知っていたのは、多少なりとも俺達の事情を知る母親達しかいなかったのだから。

その日の事は、意識が飛んだ一部を除いて、今でも鮮明に思い出せる。

それは昼飯時に起こった。

その日は珍しく、昼も夜も母さんは休みだった。

俺達は向かいあつてテーブルに座り昼食を食べていた。

こぼす事無く上手に食べる俺をニコニコと見ていた母さんが、突然叫んだ。

『バーに行きましよう！ あそこなら誰も手を出せないわ！ シュヴァアッ、早く！』

いち早くクズ共の襲撃を知つた母さんは、テーブル越しに伸ばした手で俺の手を強く握り締めると、着の身着のまま裏口から家を飛び出て駆け出した。

『おいっ！ 裏口から逃げたぞー！』

後ろの方で男達の喧騒が聞こえた。

チラリと振り返ると、軽く10を越える人数の男達が銃を構えて俺達の家を取り囲ん

でいた。

ーバンっ!!

銃声が響くより早く俺は母さんに引き寄せられ、銃声が響くと同時に母さんが倒れた。

『馬鹿かつ、ガキに当たったらどうする!?!』

『へへっ、すまねえな。でもよ、動きを止めてやったろ』

後ろの方で男達が下卑た笑いを交えながら話していた。

母さんが倒れ、俺がその場に留まった事で獲物を仕留めたと思ったのだろう。

男達が性急に追ってくる気配はなかった。

皮肉な事にこいつらの弛みが、俺に母さんと会話をする最期の機会を与える事になった。

『良かった……シユヴァ……怪我は無い?』

良いことなんか何一つないのに、口元から血を流した母さんが微笑んだんだ。

『ダメな母さんでゴメンなさいね……あなたの心が知りたくて……何を考えているのかわかりたくて……レイさんから見聞色まで習ったのに、何も分からなかったの……覗き見しようとした罰かしらね?』

『何言つてるノ? 駄目ナンかジャナイヨ! アナタハ立派に僕ヲ育てテくれテイル

！』

俺は倒れた母さんを抱き抱え、声の限りに叫んだ。

この時の俺は、母さんが何を言っているのか理解は出来なかった。

ただ、胸の辺りから滲み出る血を見て、もう助からないと強く恐怖したことを覚えている。

『他の記憶が有つてもね……シユヴァ……あなたは私達の大切な子供なの……だけどね、いつまでも子供じゃいられないの……だから、大きくなったら海に出なさい……海は広いのよ……あなたを大切に思ってくれる人に、きつと巡り逢えるわ』

俺の頬に力なく伸ばした母の手が触れる。

『な、ナンデ、記憶ノ事ヲ!? ソ、ソんな事ヨリ分かつタからモウ喋らないデ!』

『良かった……上手にお話できるじゃない……こんな事なら、もつと早くあなたと、お話しておけば良かったわね……でも、ゴメンなさい、母さんはもう、あなたとお話出来そうにないわ……。シユヴァ、人を怨んではダメよ……そんな事より海に出て、幸せ、になつ……』

最後まで言い終える事無く、俺の頬に触れた母の手が崩れ落ち、それを合図に母さんは二度と言葉を発する事は無かった。

『母さあソツー!!』

『お？ 当たったのは親の方だけか』

俺達の背後までやって来た男達が笑みを浮かべて見下ろしていた。

『才前らカ？ お前ラガやつタんだナ？』

母さんは人を怨むなと言った。

だけど、こいつらは人間なんかじゃない……クズだ。

『なんだあこのガキ？ まともに話も出来ねえのか。こんなんでも売り物になるのかよ』

『ギャハハ』

何が面白いのか、俺達の回りを取り囲んだ男達が笑っていた。

人が死んだのに、母さんが死んだのに平気で笑っていられる男達を見て、俺の心をど

す黒い感情が支配した。

『死ネ!!』

俺は抱き抱えた母さんをゆっくり地面に寝かせると、男達に襲い掛かった。

そして、俺の記憶はここで途切れた。

◇

『遅かったようだ』

『にゆく？ コレをあの子供が一人でやったのか？』

『その様だな。マズいことに打ち所が悪かった何人かが息絶えておる』

『ニユツ？ どうしてマズいんだ？』

『コヤツ等は正規の免状を持つておる。しかも今回は天竜人のお声掛かりの様なものとして動いておったのでな。下手をすれば天竜人への反逆者、そうでなくとも犯罪者として追っ手がかかる』

『にゅ〜』

意識が戻った俺が目にしたのは、死屍累々と倒れる男達の中心で、白髪交じりの爺さんが深刻そうに話し、タコの魚人が頭を掻いている姿だった。

未だ正気に戻り切っていなかった俺は、咄嗟に爺さんに飛び掛かろうとしたが寸前で思い止まった。

それは魚人としての本能か、あるいは記憶にある強者と比較して尻込みしたのか、一見すると好好爺にしか見えない爺さんは、絶対に勝てない相手、と言うより人の皮を被った化け物だと気付いたんだ。

暴れても無理……そう感じ取った俺は、母さんの亡骸を背にすると敵意を剥き出しにして、爺さんを睨み付けた。

『そう睨まんでくれ。私の名はレイリー。君の母親の……そうだな、雇い主の様な者だ』

『にゅ〜。オレははっちゃんだ。皆からはハチっと呼ばれてる。おれ達はオマエ達を助

けに来たんだ』

『一足遅かったようだがな』

六本腕が特徴的なハチの姿と名に覚えはあったが、レイリーの名は記憶になかった。

ただ、母さんが言っていたレイさんがこのレイリーの事だと目星が付いたので、敵意を抑えて瞳を閉じた。

『ひとまずここを離れよう。君の母親を吊つてやらんとな』

レイリーからそう提案された俺は、黙って頷き母さんを抱き抱えて二人の後を付いて行ったのだった。



海が見える小さな墓地に母さんの埋葬を済ませた俺は、レイリーとハチに連れられて【ぼったくりバー】と巫山戯た看板を掲げた店の前にやってきた。

ここが母さんの職場だったらしい。

店内に入ったレイリーが慣れた様子でカウンター席に座ると、そこにスツとグラスが置かれた。

『遅かったよ』



グラスに入った酒を口にしたレイリーが短く呟いた。

『そう……残念ね』

カウンター内にいるボブカットのおばさんも短くそれに答え、タバコの煙を吐いた。たったこれだけのやり取りだったけど、二人は母さんの死を悼んでくれている、と何となく理解できた。

チヨロいと言われるかもしれないが、俺はこの時から二人を信じてみようという気になつていた。

少し落ち着いて店内を見回してみると、他にも誰かが居る事に気づいた。

小さな婆さんを先頭に、黒い長い髪の少女と、その後ろで隠れ切れていないが隠れる様に、ぼつちやりした二人の少女が俺の様子を窺う様に見ていた。

『さて、何から話そう』

出された酒を飲み終えたレイリーが口を開いた。

小さな婆さん達が気になったが、レイリーが人払いをしないなら、聞かれても構わない相手なんだろう。

だったら全部だ。

俺がそう想いを込めてジツと見つめると、レイリーは小さく頷いた。

それからレイリーは色々と語ってくれた。

小さい頃の俺は酷いかんしゃく持ちの乱暴者だったこと。

ある日を境に俺は大人しい手の掛からない子になったこと。

その代わりに話さなくなったこと。

それを母さんは先祖帰りをしたと心配していたこと。

見聞色の覇気と呼ばれる技術が極まれば、他者の心を読み取れること。

そして母さんはその見聞色を身につけ俺とコミュニケーションを取ろうとしていたこと。

だけど、俺の思考が難解、と言うより多分日本語だったから何も読み取れ無かったこと。

色々と聞いた。

詰まるところ母さんは、俺が変な記憶を持っていると知りながら、それでも俺を愛してくれていたのだ。

俺も母さんも馬鹿だった。

何のことはない。

話せば良かったんだ。

この日の出来事は避けられなかったかもしれないけど、もつと楽しい日々を過ごす事は出来たはずだ。

母さんの優しさに、自分の愚かさに気付いた俺は泣いた。

この世界でただの一度も泣いた事がない俺の涙腺から、堰を切ったように涙が溢れ出した。

どれくらい泣いただろうか。

ふと気付くと目の前にハンカチがあった。

俺を笑わせようとしたのだろうか、長い黒髪の少女が天井を見上げる様な体勢で差し出していた。

あんなに綺麗だったのに鼻の穴が丸見えだった。

俺は少女からハンカチを受け取り、

ありがとう

そう告げたかったのに、言葉が出ない。

俺はこの時から喋らない子供ではなく、喋る事が出来ない子供になっていた。

我ながら脆いメンタルだと思うが、どうしても言葉がでない。

礼を言う代わりにっこり笑ってみせた俺は、ハンカチで涙を拭うと、見られていたと気付いた気恥ずかしさも手伝って、ようやく泣き止むことが出来たのだった。

『問題はこれからどうするかだ。私は君に選択肢を提示できるが、決めるのは君だ』

俺が落ち着いたのを見計らったレイリーから、今後の身の振り方の指針が告げられ

た。

俺に提示されたのは四つ。

ぼったくりバーに残るか、

ハチと共に魚人島に向かうか、

少女達と女ヶ島に向かうか、

自分の家で一人で暮らすか。

最後の一つはあまりおすすめしない、と付け足してレイリーは酒を口にして話さなくなった。

俺は、迷うことなくハチの手を取った。

レイリーに示されるまでもなく、俺はこの時点でハチと一緒に行くつもりだったんだ。

『にゅっ!? おれと来るのか?』

ハチは選ばれた事に驚いていたが喜びを隠さず、選ばれなかった黒い髪の少女はどこか残念そうにしていた。

この日以来会っていないけど、あの少女達は元気にやっているのだろうか?

そんなこんなで、とんとん拍子に俺の魚人島行きが決まったけど、ここで小さな問題

が判明した。

魚人島が有るのは海底10、000メートル。

生粋の魚人なら生身でも潜っていけるのだが、半魚人の俺はエラ呼吸が出来ない。

俺にある魚人としての特徴は背中から突き出た黒いヒレと、左右の肩甲骨の下にある気泡だけだった。

『お代はいつでも構わんよ』

結局、レイリーがコーティングした蛸壺に乗り込みハチに運ばれて魚人島に向かい、そこでアールンやジンベエに出会った。

レイリー程じゃないが二人とも化け物だった。

それからタイガーにも出会った。

タイガーこそが奴隷解放事件を引き起こした張本人だと聞いていた俺は、内心で複雑だった。

コイツが余計な事をしなければ母さんは死なずに済んだ、と思わなくもなかったが、瞳を閉ざすと首を振り、その怨みを水に流した。

ホントに悪いのはタイガーじゃない。

俺が怨むべきはタイガーじゃないんだ……。

意外だったのはアールンだ。

俺が半魚人でも、話せなくても、水中で呼吸が出来ないと知っても、ただ魚人の血を引いているだけで個性として受け入れてくれた。

必要以上に人間は下等で魚人は上等と偏った思想を植え付けようとする事を除けば、アーロンは俺にとって良い奴だった。

タイヨウの海賊団へ参加したがる俺の意をくんでくれなかったのは残念だけど、これは実力不足が理由だったから、ある意味で過保護だからだろう。

でも、参加の条件が大人になるか、ジンベエを倒す事だったのは厳し過ぎだと未だに思う。

アレは無理。

海賊団への参加を認めないかわりにアーロンは、俺に住み処を与えてくれた。

アーロンの異母妹、シャリーリーの店だ。

そこで世話になった、というより世話をした。

アオザメの人魚であるシャリーリーは、日常生活に支障をきたす程の巨体を誇っていたからな。

炊事洗濯。

料理に買い出し。

一般的に言われる家事全般が俺の役割だった。

俺は言葉を口に出来ないままジュエスチャーや筆談を駆使して魚人島での日々を過ごしたけれど、そんな程度の事で色眼鏡で見てくる人は魚人島にはいなかった。

家事をして、余った時間で身体を鍛え、魚人島の人達と触れ合い、タイヨウの海賊団が帰ってくればジンベエに勝負を挑んで完膚無きまでに叩きのめされ、また見送る。

アーロンが東の海に出航するまでの腰掛けのつもりだったけど………：………：………：………：………：………

もう無理に事を荒立てなくても、このまま平穩に暮らしていくのも悪くない………：………：………：………：………：………  
そう思いかけていた。

そんな日も長くは続かなかった。

またタイガーと天竜人だ。

天竜人に粘着されるタイガーが、海軍の罠にはまって命を失った。

タイガーを大アニキと慕っていたアーロンは、単身で海軍に挑んで捕らわれの身となった。

タイガー死亡、アーロン捕縛の報に魚人島は揺れた。

アーロンの強さを知る身としてはにわかには信じられなかったけど、天竜人が存在する以上、魚人島や俺に平穩は訪れないとよく分かった一件だ。

暫くして、ジンベエが七武海に入ると引き替えにアーロンが魚人島に戻った。

アーロンは今まで以上に強く人間を憎み見下す発言が多くなっていたが、俺には何故

か、畏れや怯えを隠す様に強がっている様にも見えた。

アーロン帝国を作る。

そう掲げたアーロンはジンベエと袂を分かつと、同志を募り海賊団を立ち上げた。

そして、出航の日。

『どうしても行くのかい？ フウ……………自慢の鼻をへし折られないよう、せいぜい麦

わら帽子に気を付けるんだね』

『シャーハツハツハツ！ へし折れねえから自慢の鼻だ！ 行くぞ、同胞達！』

見送りに来たシャーリーが謎めいた予言を告げた事で場は一時騒然となった。

アーロンが力強く笑い飛ばしてみせたが、場は騒然としたままだった。

『行くんだろ？ アーロンの事、頼んだよ』

乗船が認められず、密航しようと船に乗り込むタイミングを探っていた俺の頭上から

シャーリーが声を掛けてきた。

この兄妹、仲が良いのか悪いのか……………兄であるアーロンは俺にシャーリーの世話をさ

せ、妹であるシャーリーは俺にアーロンを頼むと託す。

言われるまでもない。

アーロンの野望の先に俺の目的がある。

きつとアーロンも俺と同じ考えに至つたのだろう。



この腐った世界をぶっ壊すには国が要る、と。

シャーリーに向かって小さく頷いた俺は、喧騒に紛れてまんまと密航に成功したのだった。

グランドラインの航海は順調に進んだ。

襲ってくる海賊達を返り討ちにして海軍に引き渡して路銀を稼ぐその様は、七武海の別働隊にも見えた。

そして、1年の時をかけて目的の島に辿り着き、海軍の案内でカームベルトを越えて今日に至る。

## 2話

「いくら出た？ 同胞よ」

「2500万と、ちよいつてとこだな」

「上出来つ。シャーハツハツハツ……！」

アーロン一味が手分けして、ココヤシ村の住人から巻き上げた金を袋に詰め込んでいく。

アーロンはそれを見て満足げに笑っているが、2500万位ならグランドラインでそこいらの海賊を蹴散らせば、容易く稼げる金額なんだよな。

尤も、この島の村はここだけでは無いようだし、安定した稼ぎとして考えれば、海賊を狩るよりも良いと判断するのも理解できる。

まあ、どちらにしても、俺は俺の目的の為にアーロンが帝国を作ると言うのなら、その野望に乗っかるだけだ。

「アーロンさん、村の外れからケ・ム・リ・D A」

「行くぞ！ 取り立てだ」

引き上げようとしていたところで、一味の一人が村の外れから立ち上る煙を見つけ、アーロン一味が連れ立って移動を始めた。

俺はその最後尾を歩きながら考える。

人間相手の荒事は面倒だし、腹も減ったし、一足先にアジト（予定地）に行ったらダメだろうか？

◇

村外れにある一軒家。

煙突から炊事の湯気が上がり、辺りに旨そうな匂いが漂っているのが空きつ腹に堪える。

アーロン、コン

アーロンがノックをしてから玄関の扉を開けて足を踏み入れると、間を置かずに銃を持った女と絡み合うように飛び出てきた。

「グランドラインの海賊が何の用？」

アーロンの口の中に銃口を突きつけた女が勇ましく睨みを利かせている。

問答無用で引き金を弾けば、あるいはアーロンを殺せたかも知れないのに随分と甘いことだ。

「無力、無力！ 下等な種族が、なんと無力な事よ」

いわんこつちやない。

アーロンが銃口を嘯み砕き、女海兵を弾き飛ばすと一瞬で形勢が逆転する。倒れた女海兵の腕を踏みつけるアーロン。

ここからの再逆転は無理だろう。

「ベルメメール!! つまらん正義感で命を無駄にするな! 金で解決出来る問題もある!」

帽子に風車を刺した駐在がやって来て、女海兵を諭し始める。

それを御丁寧聞いてやるアーロン。

粗野で乱暴に見えても話が分かる奴……アーロンのことはこう評して良いだろう。

まあ、元々が理不尽すぎる要求からのスタートの上に、アーロンが意見を変える事は滅多にないので話すこと自体が相手の不幸だったりする。

アーロンと元女海兵ベルメール、風車の駐在を加えて3人での問答が始まった。

金さえ払えば見逃す、とアーロン。

10万有る、これで村人全員無事だ、と風車の駐在。

金は払う。

但し子供達のだとベルメールが拒絶。

意味が判らない。

何故ベルメールはバレていないハズの子供達の存在を自ら明かし、自身の命を危険に晒すのだろうか？

そうこうしている内に、遅れてやって来た村人達と魚人達が交戦状態に入る。

交戦状態と言っても、手にした道具をがむしやらに振り回す村人を、魚人達が軽くあしらっているだけだ。

この島への上陸前に、可能な限り殺すなどアーロンから言われているし、傍観していても問題ない。

「ベルメールさんー」

どさくさ紛れに二人の子供が女海兵に抱き付いた。

多分オレンジ色の髪をしたのがナミだろう。

見た感じ俺と同じ年位だから、主人公のルフイがやってくるのは大体10年後辺りかと思うが自信はない。

ザツクリした展開は判っても、何年前とか何年後などの細かな数字や、登場人物がどこどこ出身とかは記憶にないんだよな。

シャーリーの予言も有ることだし、何か手を打っておいた方が良さそうだけど、今はこの場がどう収まるか見届けよう。

この顛末次第で、漫画の信憑性が推し量れるし、俺の行動は傍観のまままで決まりだ。

「テメエの娘達だな？」

「そうよ」

アーロンがベルメールに銃をつき付ける。

ベルメールは覚悟を決めた様で、啞えたタバコに火を点けて腕を組み悠然としている。

記憶にある漫画の内容が正しいなら、これは避けるコトが出来ない運命ってやつなんだろう。

ここでベルメールが死んでもナミ達が立派に育つのは漫画が証明しているし、どっちにしろ俺にアーロンを止める事は出来ないし、別に俺が招いた結果でもないし、かわいそうだが漫画通りに死んでもらうしかない。

「フンツ……くだらねえ愛に死ね」

「ノジコ！ ナミ！ ……大好き」

って………馬鹿か俺は。

俺の脳内にしかない与太話を信じて、子供の前で親を殺させるのか？

あり得ないっ!!

「止メロっ！ アーロン!!」

実に四年ぶりに声が出た。

思った以上の大声に、暴れる魚人と村人達の動きが止まり、怪我のせいか何人かその場で倒れ、残った人達の視線がこちらに注がれた。

衆目の中カタコトで話すのは恥ずかしいが、言ってる場合でも無いだろう。

「おれに指図するのはどいつだ!？」

「俺だ」

魚人達の間を割って出て進んだ俺は、アーロンと向かい合う。

つて、なにやってんだ、俺？

傍観するつて決めていたのに、ちよつとのことですぐに態度を変える俺は、どこまでも中途半端つてことか。

「てめえか、シュヴァ。話せるようになったのはめでてえことだが、おれに意見するたあ  
どういう了見だ？ エエっ!？」

アーロンが殺気を込めた眼で俺を睨む。

正直、怖い。

だが、こうなった以上ビビるな。

アーロンは同胞と認める俺を無闇矢鱈に攻撃しない……………ハズだ。

「殺ス必要ハナイ」

震えそうになるのを抑えて言葉を紡ぐ。

力で止められないなら、話して分かってもらおうしかない。考える。

屁理屈でも構わない。

アーロンは話せば分かってくれる奴なんだ。

アーロンがベルメールの殺害を思い止まるだけの理由を考えるんだ。

「オレだつて殺したかあねえさ。コイツらは大事な金づるさ！ だがなあ！ 金を払えねえなら話は別だ。おれの支配下では金のねえ奴は死ぬんだよ！」

そうだ。

金が無いから殺すんだ。

逆に言えば、金さえ有れば殺さない。

「金ナら有ル」

リュックから無造作に札束を取り出した俺は、ベルメールの目の前に札束を投げ落としてやる。

「何の真似だあ、シユヴァー！ 金をくれてやって払わせようつてんじやねえだろうなあ！？」

益々アーロンの殺気が強くなる。

ヤバイ。



切れた時の目をしてゐる。

「分かつてル。ダカラ女、ソコノ子供はオマエのダな?」

怒れるアーロンを一先ず無視した俺は、再び寄つて来ていた子供達を抱えるベルメルに問い掛けた。

「そうよつ。私の大切な娘達よ!」

「ソの金ア、ソツちノ……………紫の髪ヲ買つテヤル。ソの金ヲアーロンに払エ」

ベルメルに抱きつく二人の子供を見比べた俺は、少し悩んで紫髪の方を指名する。方便で買ったとしても、ナミが大人しく従うとは思えないからな。

「「なっ?!」」

「シャーハツハツハツ。こりやあ良い」

「貴様あつ! 何を見ていた! ベルメルは娘達の為に命をも捨てようとしていたのだぞ! それをつ……………命惜しきに娘を売れと言うのか!」

村人達が一齐に驚き、アーロンは笑い、風車の駐在が血管が切れそうな勢いで激高している。

「ダカラ良いンダロ? 子供ガ反抗すレバ女海兵ヲ殺ス。女海兵ガ反抗すレバ子供ヲ殺ス。ソレガ見エナ鎖ニナツて反抗ヲ防ぐ枷にナルカラナ」

物理的に縛る手段はないけど、奴隷です。

こんな理屈でアーロンが納得する訳がない。

これは見えない鎖という建前があるからこそ、ベルメールとナミ達の絆が強いからこそ通用する屁理屈なんだ。

「な、なんだこの子供……悪魔か？」

あれ？

なんだ、この空気？

爆笑するアーロンの殺気が収まった代わりに、村人達が怨嗟と怯えの籠もった目を俺に向けている。

「ベルメールさんつ、あたしを売って！ それでベルメールさんとナミが助かるなら

……あたしはどうなっても良いよ！」

紫髪の少女、ノジコが悲壮な決意を語っているが、ちよつと待つてほしい。

別にどうこうする気はない。

強いて言うなら生き残ったベルメールがどんな行動に出るか判らないから、その行動を防ぐ人質の役割として傍に置くくらいか。

「この悪魔！」

瞳に大粒の涙を溜めたナミが罵ってくる。

交じりつけ無しの純粋な憎悪は結構堪える。

おかしい。

俺は死ぬはずの運命だったベルメールを助けようとしているのに、どうなっている？

ベルメールはベルメールで決断出来ずにいるようだし、なにやってんだ？

親を殺されて平気な子供なんかいるわけなのに、何故生き残れる道を選ばない？

とにかくこの場をサツサと収めて撤収しないと、俺の精神力がガリガリと削られる。

「煩イ。決メルのハ女海兵、お前ダ。自己満足の為二死んデ娘達ヲ悲シマセルカ、生きテ娘達と話セル機会ヲ得るカ、ダ」

「人の弱みにつけ込みよってっ……それならワシがベルメールに貸してやるわいつ」

今度はドクター風の人物がしやしやり出てきた。

なるほど。

それが通るなら万事解決だが……俺はアローンに顔を向けて裁定を待った。

「そいつは聞けねえなあ。貸し借りは認めねえ。今10万ポツチの金を用意出来ねえ奴はこれからも用意出来ねえ。そうなった時、お前等は金を貸し続けてやるのか？ あア

ン!? 俺の支配下では金のねえ奴、稼げねえ奴は……死ねっ」

笑って見ていたアロンが貸し借りを禁じる。

これでベルメールが生き延びる道は、ノジコを売るしかなくなった。

誰もがそう思い、固唾を飲んでベルメールの次の言葉を待つていた。そんな時だ。

「アーロンさん、この家海図があるヨ」

緊迫した空気を読まない男、ハチ。

乱闘を適当に切り上げて動き回ったあげく、ベルメール宅から海図を発見したようだ。

良いもの見つけた！ とばかりに誇らしげに海図を掲げているが自由過ぎるだろ。

「ほう……こりや見事なもんだ」

「返してよっ」

ハチから海図を受け取ったアーロンは、一目でその海図の出来の良さに気付いたようだ。

「女海兵、一先ずテメエの処刑は待つてやる。同胞達よ、撤収だ！ 連れてこい」

「ういーっす」

何か思い付いた風なアーロンが口角を上げて撤収を告げる。

ハチが首根っこを掴んでナミを持ち上げると、魚人達も撤収を開始した。

「待てえい！ その子の分の金は受け取ったハズだ。ナミを返せ！」

風車の駐在が行く手を阻む。

その理屈ならベルメールの金は受け取っていない事になるから、今すぐ殺しても構わないことになるぞ。

いや、殺して構わないとか、これもう訳わかんねえな。

「クドいぜ」

「ぐわっ……」

剣を手にしたクロオビが駐在を斬りつけ、盛大に血飛沫を上げて駐在が倒れた。

どう見ても致命傷なんだが、ホントに大丈夫なのか？

俺としてはなるべく穏便に支配してアーン帝国を築きたいのに、無闇に殺してしまつては上手くいくものもいなくなる。

「クロオビ、やり過ぎだ。他の奴も下がって口、アトハ俺ガヤル」

不安を感じた俺は、対峙する村人と魚人達の間を割って入った。

あまりやりたく無いけど言ってる場合でもない。

俺は静かに闘気を高めていく。

そう言えば、この世界だと闘気は覇気と呼ばれ、俺がコレを使う事に対してアーンはあまりいい顔をしなない。

なんでも「下等な人間が用いる技術なんぞ、魚人には必要ない」との理屈だけど、便利な技術なら変なこだわりは捨てて使うべきだと俺は思うぞ。

まあ、アーロンの場合、身体能力が高すぎるから必要ないっちゃあ必要ない。

「殺すなよ。大事な金づるだからな」

「分かってルから俺ガヤルンダ」

何か言いたげなアーロンからこの場を任せられた俺は、殺気を放つ村人の気配を読み取り、すり抜けざまに顎の先、鳩尾、頸椎へと一撃をいれていく。

俺が通り抜けた後、一瞬の間を置いて村人達がバタバタと崩れ落ちた。

「そつ、そんな!?!」

「コレで判つタカ? 俺にサエ勝テナいお前達ハ、どう転ンデモアーロンにハ勝てナイ。死にタク無ければ大人しく金ヲ払エ。俺達の目的ハ虐殺ジヤナイ、支配ダ」

もつと言うなら支配は俺の目的の為の手段だが、今それを言っても受け入れられる事は無いだろう。

とにかく下手にアーロンに逆らっても死ぬだけなんだから、大人しくしてほしきもんだ。

物理的に大人しくさせるのはこれっきりにしたい。

「ま、待つてよ。ナミは? ナミは返してくれるの?」

立ち去ろうとした俺を、ベルメールを抱えたノジコが呼び止める。

この状況下でもナミの心配を口に出出来るノジコは、芯の強い良い子の様だ。

出来ればノジコの期待に応えたいけど、そういう訳にはいかないんだよな。

「決めるのはアーン。俺二聞カレてモ困ル」

アーン一味はアーンを慕う魚人達の集団だ。

基本的に決定権はアーンにしかない。

意見を言う分には、言いたい奴の自由だろう。

しかし、それを採用するかどうかはアーン次第。

アーンの方針が嫌なら一味を抜けるのが筋になってくる。

「もう良いか？ 俺は行く」

他に口を開く奴がいなかったのを確認した俺は、アーンの後を追ってココヤシ村を後にした。

◇

アジト（予定地）の入り江の港へ向かうと、用意された椅子に座ったアーンの前でナミが泣いていた。

ハチ、クロオビ、チュウの幹部達だけが関心を持ってそれを見守り、他の連中は我関せずとばかりに思い思いの場所で寛いでいる。

「戻ったか、シユヴァ」

「問題ナイ。ナゼそノ子供ヲ連れテきた？」

確認の為にアーロンに聞いてみる。

実際にグランドラインを航海してきた身としては、普通の海図とログポーズさえ有れば十分に思える。

漫画の中のアーロンはナミが作る海図に拘っていたが、このアーロンもそうなのか？  
「知れたこと。海図を書かせるのさ」

「帰してよっ！ アタシ、海図なんか書きたくない！」

「ソイツは嫌だト言ってるゾ？ 無理に書かせテも正確な物ハ出来ナイ」

「そりゃあ俺だつて分かつてるさ。だから話して聞かせてやってる。だが、聞き分けないガキでなあ……海図を書かなきゃ女海兵を殺すと言つてもこの調子だ。首を縦に振りやがらねえ」

そう言つてアーロンは、お手上げとばかりに首を振る。

いや、そりゃそうだろ。

つてか、脅しの材料に使う為に敢えてベルメールを見逃したのか。

流石アーロン、えげつねえし頭も回る。

その頭の良さをもうちよつとだけ、生かさず殺さず方面に使つてくれれば言うこと無



いんだけど……って、無理な相談か。

アーロンの怒りはよく分かるし、俺が何とか上手く回していくしかない。

とりあえずナミをどうするかだな……。

このまま何もせずにナミを帰せば、金を払っていないベルメールの命が危くなる。

ここでナミを始末すれば後々の憂いは潰せるのだが、それをやってしまうとココヤシ村の反乱を招き支配が覚束なくなる。

ナミが本心から俺達の仲間になってくれるなら、それが一番良いんだけど………無理だよなあ。

結局、アーロンの意向もあるし、ナミには悪いが漫画通りの展開に持ち込み、村の解放を餌にして海図を書かせるのがベターってことか。

因みに、島の支配を諦める選択肢はない。

「アーロンさんっ！ 海軍だ。支部の連中が来やがった」

「ここは俺達が行こう。シュヴァ、やり過ぎても文句はあるまい？」

俺が考えあぐねていると、岸辺で寛いでいた連中の一人が報告にやってきた。

それを受けて3人の幹部がゴミ掃除は任せるとばかりに名乗りをあげる。

「当たり前だ。腐った海軍ナンかコの世界カラ消えテ無クなレバ良イ」

海軍が正義を掲げるなんて片腹痛い。

己が正義だというのなら、先ずはゴミそのものの天竜人をなんとかしろってんだ。

ゴミを片付けるどころか、ゴミが幅を利かせる手助けをしている海軍は組織として腐っていると断言してやる。

海軍の中には、本気で海賊を憎み正義の為に命を捧げている人も居るだろう。

だが、そんな人達であつても腐つた組織の権勢に加担しているのだから、俺にとつて敵ではない。

「何よっ！ 腐つてるのはアンタ達じゃない。村の皆を傷つけてっ、お金を盗つてっ……アンタ達なんか全員捕まって死刑になれば良いのよっ」

「フんっ……サつきマで泣いテタクセに急二威勢が良くなつタナ。助かつタ、トでモ思つたノカ？」

痛いところを突かれた俺は、ついつい子供のナミと張り合つてしまふ。

立ち位置が違うナミ達ココヤシ村の人達から見れば俺達は侵略者で、悪なんだよな。

でもアーロン帝国さえ築いたら、国盗りとして評価されるハズ………それまでは、なんと思われようがアーロンを支えてみせる。

中途半端を自負する俺だけど、こればかりは譲れない。

海軍の勝利を願うナミ。

魚人の勝利を疑わない俺。

正反対の想いを抱いた俺達が見詰める中で、数分としないうちに海軍の船が沈んでいく。

船さえ沈めれば勝ちになる海上で、魚人達とやり合おうつてのが無策にすぎる。

驕り高ぶる海軍なんて、所詮こんなもんだ。

「そ、そんな……」

さつきとは打って変わって怯えた表情になったナミが言葉に詰まる。

「コの子供ガ一番欲しいモノを売つてやれば良い」

怯えたナミをみるにつけた俺は、もう早く終わらそうと漫画を参考にした取り引き案を口にする。

色々考えてみても今の俺に出来る事は限られているし、ここでナミと口論してもあまり意味はない。

「ほう？」

「一味に入つて海図を書くのを前提にシテ、ココヤシ村ヲ売つてやるんだ。額ハ……一億でドウダ？」

「そりゃあ悪くねえ取り引きだ。そうは思わないか、お嬢ちゃん？　ただし、額は三億だ」

口角を上げたアローロンが腕を突き出して三本の指を立てた。

「なっ!? アーロンっ、いくらなんでもソの額は無茶ダ」

あれ?

なんでだ?

漫画だと守る気があったのかどうかは別にして、年間三億の収入が見込めるココヤシ村の権利を、一億程度で払い下げる契約をするはずだぞ。

「シユヴァ……俺は譲歩してテメエの意見を聞き入れてやつてるんだぜ? それとも何か? 俺はお前の意見を丸呑みしてやらなきやイケねえってのか?」

そうか。

俺が余計な事を言ったせいで、アーロンは自分の威厳を保つ為に金額を上乗せしたのか。

なかなか難しいもんだな。

結果を知る俺が先んじて動いたら結果が変わる事もあるということか。

「分かった。海図書く。一味に入って海図を書いたら、村を売ってくれるんだよね?」

「俺は金の上での約束は死んでも守る男さ。シャーハッハッハッ!」

いや、もうなんか、ごめんなさい。

とんとん拍子に話が纏まるのを横目に、俺は内心でナミに謝った。

まあ、でも、ベルメールは多分生き残れたし、総合的に見れば上手くいったはずだ。

そしてこれは、漫画の内容は決まった運命ではないということも示している。上手くやれば破滅の道を避け、アーロン帝国を作る事だつて出来るはずだ。俺は高笑いを続けるアーロンの横で、密かに決意を固めるのだった。

### 3話 ベルメール

あーあ、やつちやつた……。

万引きしたナミを叱りつけ、そこから発展して我が子相手に大喧嘩。

これじゃ未だにゲンさんから不良娘扱いされるのも無理ないわね。

ノジコに諭されて落ち着いた私は、ナミの迎えをノジコに任せ、特製の料理を作つて二人が戻るのを待つことにした。

家計に大打撃だけど、たまには良いわよね。

あら？ 外が騒がしい。

ーコン、コンッ

ーコン、コンッ

おかしいわね。

この島にノックを繰り返す様な人はいない。

窓に映る影も一人や二人じゃないみたいだし、これはホントにまずい事が起こりそ

う。

銃を手にした私は、扉の近くで待ち構える。

「はーい。空いてるわよー」

「失礼」

そう言つて入つてきた人物に全体重を乗せた蹴り浴びせて押し倒した私は、銃を突きつけた。

魚人？

「グランドラインの海賊が何の用？」

威丈高に言つたけど、私は内心で焦りを覚えていた。

これでも私は元海兵。

その縁もあつて、グランドラインの情勢を多少なりとも仕入れていた。

この時期に連れ立つて魚人がやつてきたなら、それはアーロン一味しか考えられなかつた。

王下七武海になつたジンベエと肩を並べたと言われるアーロン……もし、コイツが噂のアーロンなら私じゃ勝てない。

私は優位なマウントポジションを取りながら、そう気後れしていた。

「無力、無力！」

一瞬の躊躇いが私から勝機を奪う。

私の推察は悪い方の中でした。

無造作に振り払ったアールロンの手は信じられないほど重く、私の身体を軽々と吹き飛ばす。

ーゴキッ

地に伏す私の左腕をアールロンが踏みつけた。

「ぐああああつー！」

アールロンは本物の化け物だ。

こんな攻撃、いえ攻撃ですらない単純な動作が私にとって、海兵時代にも受けた事がない致命的な一撃になってるなんて。

「ベルメール！　くだらん正義感で命を無駄にするな！」

私の叫びを聞いたゲンさんが助けに来てくれて、アールロン一味の目的を知ることが出来た。

大人は10万、子供は5万。

金を払えば見逃してくれるみたいだけど、これはそんな単純で甘い事態じゃないわ。

魚人達は、この村を支配しようとしている。

そうじゃないと、金額を区切る真似なんてしないで、有り金を根こそぎ奪っていくは



ずよ。

「10万あるそうだ。金が足りて良かった。これで村人は全員無事だ」

冷や汗をかいたゲンさんが、下手な演技をして必死に誤魔化そうとしてくれている。でもね、ゲンさん……それじゃ助からない。

島からの脱出手段をまず奪う、これが島を支配しようとする海賊達の常套手段。今頃きつと、この島の船は残らずこいつ等に沈められている。

もうノジコとナミは逃げられないの……。

それに、例え演技でも家族が居ないなんて言えないよ。

そう考えた私は、覚悟を決めた。

悔しいけれどお金を払って、娘達の身の安全を確保しよう。

私は助からないし、遺された娘達も苦勞するかもしれない。

でも、私の分まで生き抜いて。

生き抜けば、きつと良いことがあるんだから。

「ノジコ！ ナミ！ ……大好き」

のんびり話している時間はない。

抱き付いてきた娘達を突き放してアロンと向かい合った私は、思いの丈を一言に込めて娘達に告げた。

そして、アーロンが引き金を引く……………。

「止メロ！ アーロン！」

銃声の代わりにどこか無機質な声が響いた。

リュックを背負った黒髪に白地のラインが入った子供が、見上げるようにしてアーロンと対峙している。

『娘を売った金で払え』

子供はまるでパズルでも組み立てる様に、私達の気持ちを一切考慮しない打開策を披露した。

確かにその案なら3人とも助かる。

だけど、そんなものは受け入れられない。

娘を売るくらいなら死んだ方がマシよ。

『自己満足ノ為ニ死ンテ娘達ヲ悲シマセるカ、生きテ娘達ト話セル機会ヲ得るカ、ダ』  
私の覚悟を嘲り笑うように子供が話す。

自己満足……確かに助かる道があるのにそれを選ばないのはそうかもしれない。  
だけど、人として、親としてやっちゃいけないことだつてあるんだよ。

でもその一方で、私が死ぬと子供達が傷付くのも事実ね。

「ベルメールさん……死なないで」

「ベルメールさん……死んじややだ」

二人の娘が瞳いっぱい涙を浮かべて訴える。

私の覚悟に迷いが生じる。

「アーロンさん、この家海図があるヨ」

そうこうしている内に勝手に動き回っていたタコの魚人が、ナミが書いた海図を見つけた。

「ほう……見事なもんだ」

タコの手から海図を受け取ったアーロンが感嘆の言葉を漏らす。

「ダメっ！ それは私が書いた大事な物よ！ 返してっ」

「貴重な人材だ。連れてこい」

海図を取り返そうとしたナミが、逆に魚人に捕まり連れ去られようとしている。

止めようとしたゲンさんが斬り伏せられ、尚も魚人達に立ち向かおうとしてくれた村の皆は、たった一人の子供の流れる様な攻撃で倒された。

アーロンが化け物なら、あのシユヴァと呼ばれている子供も化け物だ。

今はまだ手が付けられる程度の化け物だけど、年齢的に見てもこれから成長していくのは間違いないんだから、アーロン以上の化け物に育つ可能性だってある。

私はアーロンよりも、シユヴァが怖い。

強さもそうだけど、あの人を人として見ていない目がなにより恐ろしい。

アーロンは良くも悪くも私達を人間として見下している。

だけどシユヴァは違う。

シユヴァの目は、私達を人間として見ていないのよ。

あれは、無機物を見るような目。

まるで盤上の駒を動かす様に、シユヴァは私達の気持ちは一切考えない。

おそらく海軍支部ではアーロンはおるかシユヴァにだって歯が立たない。

これからどうなっちゃうんだろ？

柄にもなく気弱な事を考えた私は、意識を失いその場に倒れた。



一夜明け、私はドクターの診療所のベッドの上で目を覚ました。

身体を起こした私は、ベッドの傍で眠るノジコの頭を優しく撫でる。

「ん……？ ベルメールさん!? ベルメールさあん！」

目を覚ましたノジコが私に抱き付き、アーロンに踏まれた左腕がズキッと痛む。

「目が覚めたか、ベルメール。命が有って幸いじゃが、その左腕は元通りには動かせぬか

もしれん」

ノジコの声を聞いたドクターがやって来て俯き加減に教えてくれる。

「そっかあ……蜜柑……どうしよっかなあ」

「私が手伝うから大丈夫だよ！」

「うーん……でも重いからノジコにはまだ無理かなあ」

蜜柑の収穫だけなら右腕だけでも出来るけど、左手が使えないと運べない。蜜柑でいっぱいになったコンテナって結構重いよね。

ドクターがナミの事を真っ先に言わないのは、あまり芳しくない状況だと察した私も他の事を口にして思案する。

誰もが敢えてナミの事に触れない……重い空気が病室に漂いかけた。

そんな時、アーロン一味に連れ去られたナミが戻ったと知らせが入る。

「行こう、ベルメールさん！」

満面の笑みを浮かべたノジコが私の手を握る。

◇

村の大通りに向かうと、既に沢山の人達が集まっていた。

その中心にはナミが居る。

良かった。

見た感じ怪我も無いし自分の足で立って歩いてる。

でも、心なしかナミの様子がおかしいわ。

笑みこそ浮かべているけど、ナミはこんな能面みたいな作り笑いをする子じゃない。

「ナミ……無事で良かった。変な事されなかったかい？」

「私……アーロン一味に入って海図書くの」

私の問いかけに札束を取り出して握りしめたナミの肩に、アーロン一味の証となる入れ墨が掘られていた。

「許さない！ 私達の為にベルメールさんは死ぬとこだったのよ！ アイツらに殺されかけた」

入れ墨を見たノジコが激昂し、ナミに飛び掛かる。

馬乗りになったノジコがナミの頭を揺すって怒りをぶつけ、それに応じてナミも心無い言葉を口にした。

「出て行け、ナミ！ もう二度とこの村に足を踏み入れるな！」

見かねたゲンさんがノジコを制止して、ナミを怒鳴りつけた。

涙を溜めたナミが走り去る。

「ナミ！」

「出過ぎた真似をして、すまん……………だが、ナミにとつてお前は親じゃなかったというのか」

違う。

そんなことはない。

貧乏だったけど、私達は確かに家族だった。

走り去った時のあの子の顔は、言いたい事を我慢している時の顔よ。

きつと何か事情がある。

親の私があの子を信じてあげなくてどうするのよ。

「ベルメールさん……………」

ノジコが何かを訴える様に私の服の裾を引っ張っている。

分かってるよ、ノジコ。

ナミを迎えに行きましょう。

◇

波の音が聞こえる高台。

お気に入り入りの場所でナミは膝を抱えて蹲っていた。

「どうしたのよ、ナミい?」

務めて明るく声をかけてナミから事情を聞いてみると、それは予想を超えた酷いものだった。

助けに来た海軍の船5隻が簡単に沈められた。

それを目の当たりにしたナミは、村を救うにはもう自分で何とかするしかないと思っただそうよ。

そして、交わした契約が三億ベリで村を買う。

額を決めたのはアーロンだけど、発案したのはシユヴァ。

子供が考えつく様な内容じゃないわよね。

人の弱みに付け込んだ悪魔の様な発想。

村の買い取りを餌にしてナミに海図を書かせようって魂胆が見え見えだけど、逆らえない。

「本部は動かない。余計なことはするな……ってシユヴァが言ってたよ」

「そう……」

シユヴァからの伝言を聞いた私の心境は、「やっぱりね」だった。

この大海賊時代にはよくある話。



王下七武海制度を筆頭に、手が付けられない海賊達の黙認。

多数の為に少数を切り捨てる施策は、世界中のあちらこちらで散見されるのが現実。これは政府が悪い訳じゃない……人手が絶対的に足りないのよ。

王下七武海制度はその足りない人手を補う意味もあつて、海軍の中に反対意見があつても続いている。

小難しい話は抜きにして要するにと言うと、このココヤシ村は政府に見捨てられたということね。

そして、私への伝言をわざわざナミに与えたのは「余計な事をすればナミを殺す」と暗に伝えたかったのでしょうかね。

上等じゃない。

そっちがその気なら、こっちは意地でも生き抜いてやるんだから。

その日からアールン一味による村の支配が始まった。



「邪魔ヲすル」

三日後、全く悪びれた様子もなく、シユヴァが我が家にやってきた。

この先、金が払えなくなりそうな家を回って助言するというシュヴァアが選んだ一件目だが、私……って余計なお世話よっ。

「ドウセ子供の金ハ使ワナイんだ口？」

勝手にテーブルに座ったシュヴァアは、蜜柑を手にすると四つに割って食べ始めた。変わった剥き方だと思いつながら手元を見ていると、水掻きがない事に気が付いた。

この子、魚人じゃない？

だつたらどうしてアローン一味に？

「ええ、そうだけどあんた達には関係ないでしょ！ さあ、用が済んだなら帰ってくれない？ タダでさえあんた達のせいで、こっちは肩身が狭いのよ」

ナミの事情は村の皆に言つてある。

家族であるナミが村を裏切つてアローン一味に入ったんだから、私達の肩身も狭い……ということになっている。

そして、ナミとアローン一味に対してはそう振る舞うと決めている。そうしないと、私達の期待がナミの足かせになつちゃうからね。

「ン？ ソウだつタナ。肩身が狭い振りモ大変タナ」

「どうして!?! まさかつ、見聞色!?!」

いずれはバレるかもしれないと思つていたけど、いくらなんでも早過ぎるわ。

「あつ………さあナ。トニかく俺達としてモ、イキナリ死なレテは困ル。金が払エナイ奴ハ殺ス。殺セバ数が減つテ実入りが減ル。子供、デモ判る理屈ダロ？　そういう訳だから、話だケデモ聞ケ」

「勝手な理屈ね………それで、話つて？」

話したくはないけど、シユヴァが見聞色を使えるか確かめておく必要がある。

もしも、シユヴァが見聞色の覇気を使いこなしているなら、私達が何を考えても筒抜けになってしまう。

話してみると、どこで得た知識なのかシユヴァは蜜柑農家の事情を知っていた。

蜜柑に限らず、専門農家の大半は収穫時期以外は収入が見込めないのよね。

私とノジコの方で毎月15万となると確かに厳しい。

「ダカラ1年分ノまとめ払いヲ特別に認めてヤル。たダし前払いダ」

「そんなの無理に決まつてるじゃない！　うちは貧乏なのっ」

「貧乏そウダカラ俺が来たンダ。良いカ？　奉貢さエ払えバ俺達ハ関知シナイ。ソの後デ生活費が足りナクナつて誰か二借りタトしてモ、ダ」

「お金が無いって言つてるのに、まとめてなんか払える訳ないし、払う意味も無いじゃない！　ね、ベルメールさん？」

うちは確かに貧乏だけど、二人して貧乏貧乏言わなくても良いじゃない。

今年はずっと何処も豊作過ぎて売れ行きが良くないだけなんだから。

それと、ノジコ。

シュヴァアが言ってるのはそういう意味じゃないよ。

「なるほどねえ。確かにあの時アーロンは借りた金での奉貢は禁じたけど、生活費の貸し借りまでは禁じていないわね。だけど、そう上手くはいかないよ」

作つても売れない現状をシュヴァアに教えてやる。

それにしても、アーロンの言質を逆手に取るこんな発想が出来るなんて、この子は見た目通りの年齢なのかしら？

「ソんなことか。問題ナイ。俺達ガ売り捌ク」

そう言つてシュヴァアが提示した条件は悪くなかつた。

魚人としての能力を活かし通常の3倍の早さで運搬し、それによつて通常の3倍近い広さの販路が構築出来る。

販路が大幅に広がれば、それだけ売れる可能性も高くなる。

海賊に襲われても返り討ちにする自信満々で言い放ち、万一積み荷の損失が出た場合は幾らかの保障をしないとまで言つてきた。

船体を赤く塗れば完璧とかも言つていたけど、色は関係ないわよね？

もしこれが、アーロン一味からの提示でなく色がオレンジなら私は喜んで契約したで

しようね。

でも私達を支配して、ナミを苦しめる魚人と手を組むのは気が引ける。

「何ヲ迷う？　コノ条件でモお前の利益ハ充分に見込めるハズだ。こつちモ人手を出す以上、これ以上はドウにもナラナイゾ」

私が何を考えて迷っているのかシユヴァは心底分かっていない。

と言うことは、シユヴァは見聞色を使いこなして私の考えを読んでいるわけでもないようね。

だったらどうしてナミの事を知っていたのかしら？

考えたくないけど、村人の中に密告者が………いえつ、そんなことはあり得ないわ。

ナミの態度がおかしいと集まってくれた村の皆の中に、魚人に媚びを売る様な真似をする人は居ないと信じてる。

だったら、何故………？

「せつかく作つたんだから売ろうよ！」

そっか。

そうだよね、ノジコ。

決め手になつたのはノジコの言葉と腐らせるのは勿体ないの精神。

私はシユヴァと販売契約を結んだ。

「それジャアナ」

「待ちなつ……シユヴァ、アンタのホントの歳は幾つなんだい？」

話してみた感じシユヴァが見た目通りの年齢とは到底思えない。

世の中には容姿だけでなく、年齢そのものを変える悪魔の実もあると聞くし、シユヴァもこれ食しているのではないかとアタリをつける。

そして私は後悔した。

好奇心は身を滅ぼすつてよく言ったものね。

「母さんガ俺ヲ産んでから10年ダ。ソレガドウシタ？」

妙な言い回しで年齢を答えたシユヴァは、恐ろしい迄の殺気を私に叩きつけてくる。

理由は判らないけどシユヴァに年齢を聞くのはタブーつて事ね。

「じゃあ私より2歳も年下じゃない。年下なんだからあんまり偉そうにしないでよね」

「残念だナ。俺は支配者側テお前は支配される側ダ。歳は関係ナイ。偉そうにサレたくないナラお前達モこつち側に来ればイイ。歓迎してやるゾ」

「絶対に嫌！」

シユヴァの恐さに気付かないノジコが舌を出す。

不思議と怒る気配を見せないシユヴァは「残念だな」と言い残して帰っていった。



それからシュヴァは、他にも村を回って金をばらまいた。  
アーロン一味が暮らす居城を作るから人手を出せ。

金は払う。

朝の8時から夜の8時まで見張りを置く。

二人一組。男女のペアは認めない。

金は払う。

交用用の船を作る。

金は払う。

アーロンが鞭ならシュヴァは飴。

でもね。

シュヴァの奴は自分の施策が、アタシ達の心を踏みにじっているとは露程も分かっているじゃないんだよ。

自分達を支配する奴等の居城を作らなくちゃいけない人々の気持ち分かるかい？  
船を沈められた漁師がアンタ達の船を作るやるせなさが分かるかい？

金は払う？

その金は元々、私達から巻き上げたもんじやないか？

支払われた金がホンの数日前まで自分の手元にあつた金だと気付いた人の気持ちがかかるのかい？

『当たり前ダロ？ 金を循環させて何が悪い？』

悪びれる事無くシユヴァは言う。

確かに海軍学校で習つた経済学でもお金の循環が大事だと言つていたから、アンタは間違つていないだろうね。

だけどね、私達はあんた達の支配を認めていないし、望んでもいないんだよ。

娘を人質に取られ、闘う娘を見守る事しか出来ない親の気持ちが分かるのかい？

あの日から3年経つた。

アーロンの支配は今も続いている。

ナミの闘いも続いている。

幸い、村人の中に死者は出ていない。

だけど、最近になって問題が出た。

「ねえ、ベルメールさん？ アイツつて実は良い奴なんじやないかな？ ナミのことも手伝つてくれるみたいだしさ」

ノジコが話すアイツとはシユヴァの事。



ハア……。

得体が知れないシュヴァだけは止めといてほしいんだけど、言っても聞かないんでしようね。

なんたってノジコは私の娘なんだから。

## 4話 ノジコ

アーロン一味がやってきてから4年が過ぎた。

私達の耐え忍ぶ戦いも、ナミの村を買い戻す為の戦いも続いている。

表立って問題が起きないのはアイツ……シユヴァに依るところが大きいと思う。

ベルメールさんは警戒してるけど、私はそれほどアイツが悪い奴には思えない。

今日も蜜柑販売の打ち合わせにやって来る。

ーコン、コン

「はーい。空いてるわよ」

「邪魔をすル………ん？　ベルメールは居ないのか？」

「ええ。今日は見張り台に立ってるわ。誰かさん達のせいで何かと物入りだからねえ」

「そうか。邪魔をしタ」

私の嫌味にも動じた様子をみせないシユヴァは、ベルメールさんが居ないと知ると直ぐにも立ち去ろうと踵を返す。

「ちよっと待ってよ!?　せつかく来たんだからお茶位飲んでいきなよ?　相談したいこ

ともあるし」

「相談……？ 嫌な予感しかしないゾ」

「まあまあ、そんなこと言わずに。はい、どうぞ」

二人分の紅茶を置いた私は、シユヴァを無理やりテーブルに座らせると対面に座り、村の人から受けていた相談事を語り始めた。

それは、妊娠した若夫婦からの相談。

今でさえ二人で必死に働き、やつとの思いで貢ぎ金を支払っている。

出産する事になれば、奥さんは一時的に働けなくなるし、子供が産まれたら世話をしないといけないし、子供の為の出費が増えるし、子供の貢ぎ金の問題だってある。

収入が減り、出費が嵩み、更に子供の貢ぎ金までのしかかると、若夫婦の生活は立ち行かなくなる。

「つてわけなんだけど、なんとかならない？」

手にしたカップに視線を落としながら話終えた私が顔を上げてシユヴァを見ると、物凄く嫌そうな顔をしていた。

目尻をさげ、眉間にしわを寄せるシユヴァ。

人つて表情だけで嫌と表現できるモノなのね。

「そんな嫌そうにしなくても……」

「嫌なモノは嫌だからナ。大体、なんで俺に聞ク？ チユウとかに聞けヨ」

「話したことないし。アンタがこの村の担当でしょ？」

「いや、違うし。村担当とかねえカラ。そもそも論で言うとな。子供が出来たら生活の見通しが立たなくなるってんなら、そういう事をするなって話ダ。ハア、マジやってらんねえー」

そうぼやいてテーブルにグデツと突つ伏したシユヴァは、「アイツ等マジ働かねえし、支配する気あんのかヨ」と尚もぼやいている。

「そういう事って……………あつ」

子供が出来たという事は、あの若夫婦の二人は当たり前前だけどそういう事をしていくことになる。

若夫婦の痴態を思わず想像してしまった私の顔が赤くなる。

「なんで顔を赤くするかナ？ イチイチそんな事で動揺するお子様なら首を突つ込んでくるなヨ」

「う、五月蠅いわねつ。元はと言えばアンタ達が金を巻き上げるせいでこうなってるんだろ!? 私達は自由に子供を作ったらいけないって言うつもり？」

「子供を作りたいなら作れば良イ。将来的に貢ぎ金が増えるんだカラ、むしろ歓迎してやる。俺が言ってるのハ、金を巻き上げられているというなら、その現状を踏まえて計

画的に中出しシロって話だ」

「な、中だ……って、あ、アンタさつきからわざと云ってるでしょ!」

「だから、なんで顔を赤らめル? ハア……お子様なノジコじや話にならないナ  
………なんでその夫婦が自分で言いに来ないんだ?」

「私が請け負ったからよっ! アンタ達とは私が交渉するんだよ! それとつ、お子様  
お子様って馬鹿にしないでっ」

「子供は子供だロ? 俺達の支配下では18歳以下はお子様と見なすから奉貢を50,  
000と取り決めてるんだ。まあ、話は聞いてやるかう若夫婦当人がアールンパークを  
訪ねるように伝えてくれ」

呆れた様子のシュヴァアが話は終わりだとばかりに立ち上がる。

「ま、待ってよ」

悔しい。

年下のシュヴァアに子供扱いされる事も、せつかく相談されたのにメツセンジャーにし  
かなれない事も。

「まだなんかあんのカ? 俺って結構忙しいんだから手短かに頼むゾ」

基本的に働かない魚人の中にあつて、シュヴァアは一人で忙しそうに働いている。

シュヴァアのせいで魚人の支配が続いているとも言えるし、シュヴァアのおかげで村人の

生活が成立しているとも言える。

シユヴァの評価は村人の間でも分かれる所だけど、一つ言えるのは皆がコイツには一目置いてる。

私より年下のくせに、誰もコイツを子供扱いしないんだよ。

ナミだつて私より年下なのに、ずっと一人で戦っている。

私は、ベルメールさんと暮らして、ベルメールさんの畑仕事を手伝つて、ベルメールさんに奉貢を払つてもらっている。

私は……私は……

「私は子供じゃない……」

「ん？ ああ……そうだな。悪かつた」

私が短く呟いただけで、察した様にシユヴァは謝罪して軽く頭を下げる。

「またそうやって馬鹿にして！ 私はもう立派な大人なんだよ」

何故だか一步引いてあやすようなシユヴァの大人びた態度が堪に触る。

「だから、悪かつたナ。でも、外じゃあんまり言うなヨ？ 貢ぎ金が増えるゾ」

「別に良いわよ！ 私はもう大人だし、子供だつて作れる」

「……ハ？ 何を言い出すんだ？」

「な、なんやらやってみる？」

シユヴァの前に立った私は首筋に腕を回した。

「……………お前、いくつになつた？」

困り顔で私をジツと見ていたシユヴァが口を開く。

「16よ」

「そうか……………まあ、ギリ大丈夫カ」

そう呟いたシユヴァが私を軽々と抱き上げる。

俗に言うお姫様だつこで、私は部屋の隅に置かれたベッドへと運ばれる。

私を座らせ、向かい合つてシユヴァも座る。

前から胸に手を当てたシユヴァに軽く押された私はベッドの上に倒された。

ギシツとベッドが軋みシユヴァが私に覆い被さる。

ヤバイくらい心臓が高鳴る私と違い、シユヴァは随分と手慣れている。

シユヴァの背中に回そうとした私の手が、リュックに遮られる。

「ね、ねえ？ リュック、脱ぎなよ」

勢いだけで始まつてしまつたけど、どうせするならちやんとした雰囲気でしたい。

私は多分、初めて会つた日からコイツの事が嫌いじゃない。

ナミは絶対認めないけど、コイツが居なかつたら多分あの時、ベルメールさんは殺さ

れていた。

「ん……そうだな」

一瞬真顔になったシユヴァはベッドから降りると、そのままクルリと背を向けて入口へと歩き始めた。

「ちよつと、どういうつもり!？」

「少し……からかっただけだ。俺の黒く反り返ったモノを見たらビックリするじゃ済まないからな。まあ、さっきの相談事はアーロンと話をつけておいてやる。夕方、結果を伝えに来るから当事者のバカ夫婦も呼んでおけ」

「??っ! 巫山戯んなつ! バカっ! 死んじゃえつ!」

私はシユヴァが居なくなつて閉じられたドアに向かって叫び、手近にある物を力いっぱい投げつける。

そうやって誰も居なくなつた部屋で一人で暴れ、暫くしてから気が付いた。

「あつ………話、つけてくれるんだ……」

アーロン一味の決定権の全てはアーロンにある。

あのアーロンに意見するのは魚人でも怖いハズなのに、シユヴァはなんだかんだで私達の話の聞いてくれるのよね。

「伝えに行かなきゃ……」

私は下着を履き替えると、若夫婦の元へと走った。





ーコン、コン

「はい、空いてるわよー」

夕暮れ時。

シユヴァは約束通りにやって来た。

「邪魔をすル」

仏頂面をしたシユヴァは、私とベルメールさん、それに若夫婦が揃っているのを確認すると、空いている席に腰を下ろした。

「あ、あのね、怒らないで聞いてほしいんだけど……」

「2年ダ」

ムスツとしたままシユヴァが呟く。

「えっ？ 2年って？！」

聞けば申請してからの2年の間、子供は当然として母親の分の貢ぎ金も免除する。

ただし虚偽の申告は極刑をもって罰するといった厳しいものだけど、それは仕方がないと思う。

ホントは5年位は免除にしたかった、と口惜しそうにシユヴァは締め括った。

予想を遙かに超えた内容に場が静まる。

私達は、産まれてくる子供の分だけでもなんとかならないかと考えていたのに、母親分まで免除となると望外の計らいと言える。

種族主義のアーロンがこんな内容で簡単に領くハズもないから、シユヴァは相当タフな交渉をしてくれたことになる。

い、言えない。

妊娠は若夫婦の勘違いだったなんて。

「べ、ベルメールさん？」

私は助けを求めるように目配せする。

「へ、へえ、頑張ってくれたじゃない。お礼に特製蜜柑ソースのオムレツをご馳走するわ」

まさかの先延ばし!?

ベルメールさん、それ、駄目な大人の典型だよ。

「悪いが遠慮すル。戻って布告用の看板と正式な文言を作らないといけないんだ」

「えっ? 今から?」

「ああ、これは大事な事だからナ。早いほど良い。夜通しかければ明日の朝一には間に

合うだ口」

「す、すいませんでしたー!」

シュヴァが徹夜宣言をしたところで、若旦那が華麗にジャンピング土下座を決めた。

「何の真似ダ？」

「お、怒らないで聞いてほしいんだけど、妊娠は勘違いだったの。ほら？ アンタ達のせいでストレスとかあるから多分そのせいだよ」

「そうか……まあ、別に良いけど一つ聞かせてくれ」

「は、はい」

「勘違いしたのは、子供を作るつもりで中出ししたことがあるからカ？」

「ちよつと、何聴いてるのよ!？」

「子供は黙って口。俺は真剣に聴いてるんだ」

その言葉通り、シュヴァの表情は真剣そのもの。

びくびくしながら質問に答える若旦那の声を聞いていた。

「そう……カ」

答えを聞き終えたシュヴァは、どこか寂しげに呟くと「布告は出す、精々励め」と言い残して帰って行った。

そして、この日から私とシュヴァは疎遠になった。



## 5話 ナミ ONE

今回の収穫は上々だったわ。

馬鹿な海賊達から財宝の他に強力な毒薬を手に入れる事が出来た。

これさえ有ればアーロンを仕留める事が出来るっ……。

アーロンの支配が始まってから6年。

この6年で判ったことがあるの。

それは、支配に乗り気なのはアーロンとシュヴァの二人だけってこと。

他の連中はアーロンに従っているだけで、別にこの島の支配になんか興味はない。

シュヴァの奴にしたって色々と逆らうような意見を言ったりしてみても、結局最後はアーロンに従うのよね。

あくまでもアーロンあつてのアーロン一味。

だからアーロンさえ始末出来れば、私は殺されちゃうかもしれないけど、他の連中は魚人島に帰っていくはずなのよ。

危険なのは判ってる。

だけど、もうあまり時間がない。

この島に生きる人達の、生活の糧を得る手段が魚人頼りになってしまってきている。逆らいたくても逆らえない。

口には出さなくても、もうこのままで良いと考える人達が増えてきている。

私はそんなのは絶対に認めない。

あいつらさえ来なければ、私達は私達だけで自由に暮らせていたんだから。

だから私はっ、今日こそアーロンをつ！

「無事に戻れて何よりダ。麦わらの海賊には会ったカ？」

「シュヴァア……!!? 会ってないし、なんでここにいるのよ」

意気込んでアーロンパークの門をあけると、そこにはシュヴァアが待ち構えるように立っていた。

いつもいつも、私がアーロンを殺そうと決意をした時に限ってコイツは居る。

「そうか……まあ、久々に身体検査でもしておこうかと思つてナ」

「好きにすれば？」

私は抵抗することなく両腕を上げた。

大丈夫。

身体検査をされるのはコレが初めてじゃない。

ポケットの中を確認するように服の上から軽く叩いていくだけよ。

今まではそれで見つかったけど、今日の隠し場所は一味違う。

私も成長しているの。

「あれ？」

「どう？ 満足した？」

「……ああ、なるほど。 お前、面倒くせえことすんなよなあ」

一通り叩き終えて何も見つけれなかったシユヴァは、私を見て勝手に頷くと嫌そうな顔をしてぼやいた。

そして、素早く私の胸を掴み襟首から胸元に手を差し入れた。

「ちよつと、何する気っ!？」

咄嗟に腕を払い除けて後ろに下がったけど遅かったみたいね。

シユヴァの手には私が胸の谷間に隠しておいた折りたたみ式のナイフが握られている。

「それはこつちの台詞ダ。 こんなもんを忍ばせて何する気ダ？」

「護身用よっ」

「ふーん？ 護身用ねえ……って毒力？」

折りたたみ式のナイフをまじまじと見たシュヴァアは、刃先を出すとそこに滴る液体を舐め取った。

人間が体内に取り込むと1時間もしない内に死に至る毒なのに、全然平気そうにしている。

『象とかを0.1ミリで痺れさせるくらいの毒じゃないと俺達には効かない』とか言つてナイフを返してくれたけど、そんな毒なんて手に入る訳ないじゃない。

ナイフをそのまま返してくれたのだから、やれるもんならやつてみな！ と内心で馬鹿にしているからに決まってるわ。

「アンタってホンつとヤな奴ね」

「そうか？ 俺は結構良いことしてるつもりだよ。それはそうと、やつば海賊相手の泥棒稼業を辞めるつもりはないのか？」

シュヴァアは半年くらい前から私に、泥棒を辞めろと勧めてくるようになった。

そう言えば『麦わらの海賊』とか聞いてくる様になったのもその頃からね。

麦わらの海賊がなんなのか分からないけど、泥棒稼業に関しては、多分私が順調に稼いでいるのを知つて辞めさせたいのでしょうけど、お生憎様。

「ないわ。金の上での約束は守るんですよ！ だつたら私の金稼ぎの邪魔をしないでくれる？」



「別に賞金稼ぎとかでも良いだ口？」

「嫌よ！ 人殺しのアンタ達と一緒にしないで」

海賊相手の賞金稼ぎだと命のやり取りになる。

いくら海賊が相手でも人殺しには成りたくないし、懸賞金のアベレージが低い東の海で賞金稼ぎは割に合わないと思うのよね。

それに、私は腕つぶしには自信がないから逆に命を落とす可能性だつてある。

それを言つてやると、『修業すればいいだろ？』と変な方法を教えてきたのもコイツよね。

私は棒を武器にするから、水平に構えた棒を突いて姿勢を正してお辞儀する……これを一日一万回すれば強くなるとか、わけわかんない。

お辞儀する意味つてあるの？

「なんだ、知らないのか？ 海賊はクズだから始末しても人殺しにはならないゾ」

「……アンタ、自分達も海賊だつて忘れてるの？ あつ、そうだ！ アンタが三億くれるなら、泥棒辞めても良いわよ？」

「おつ……そうか。その手があるのか……」

嫌味で言つたはずの言葉を聞いたシユヴァアが、ハツとした表情を見せて考え出した。

シユヴァアつて顔に出るからわかりやすい。

コイツは今、本気で閃いた！　って感じにいるわ。  
でも、

「わけわかんない……アンタと話していると疲れるし、私はもう行くわよ」

私に三億を渡せばココヤシ村の権利を手放す事になるって分かってるのかしら？

『パークの金は使えないし、俺は金持ってないし、どうすっかな』とブツブツ言うシユ  
ヴァを残して私はアローンパークを後にした。

◇

ココヤシ村へと向かう道すがら、前方から荷物を肩に掲げた人物が向かってきた。

「にゅっ!?　ナミじゃねえか。お前、こんなところで何してるんだ？」

「家に帰るところよっ。悪い？」

私に気付いたタコの魚人、ハチが足を止めて私に話しかけてくる。

私は自然とトゲのある返事をしてしまう。

こっちは仲良くする気なんてないのに良い迷惑。

「にゅ〜。そうだったな。こっちに行けばココヤシ村だな。おれか？　おれはココヤシ

村でモームのエサを買ったその帰りだ」

聞いてもいないのにハチは自分の事情を語り出した。  
「そうなのよね。」

魚人達は私達からお金は巻き上げるけど、それ以外は奪ったりしない。飲み食いや、建設、建築……魚人達は何をするにもきつちりとお金を払う。

アーロンはこれを金の上での約束で、良い世の中は金が回ると言っていたけど、私は違うと思う。

魚人達が使ったお金は、どうせ後から貢ぎ金として回収出来るって腹づもりなのよ。

「はいはい……ご苦労さま。ねえ……シユヴァってどんな奴？」

戯れにシユヴァの事を聞いてみる。

実はハチって無害な奴だし、周りに他の魚人が居ない機会も中々ない。

「変なこと聞く奴だな？ ナミはシユヴァを知ってるハズだぞ。おれか？ おれはシユヴァとは付き合いが一番長いんだ。アイツは働きモンの良い奴だな」

シユヴァが良い奴ですって？

どこがよ！

この前だつて徒党を組んでお金を稼ぐ人達に対して、『会社は法人とみなす。利益の半分を納めろ』とかわけわからん事言いだして、お金を巻き上げる仕組みを作った。その影響が大きい港町ゴザの人達がカンカンになって怒っていても、シユヴァはどこ

吹く風で気にしない様な奴よ。

「ハチが知ってる子供の頃のシユヴァがどんな奴とか、秘密とか有ったら教えてほしいかなあ、って」

反論したいのをぐつと我慢した私は、続いてハチに尋ねた。

シユヴァはやたら強いし、変なこと知ってるし、妙に勘が鋭いし、毒も効かないし、絶対になにか秘密があるはずよ。

「にゅ〜？ それは人間の悪いトコだと思っぞ、ナミ。シユヴァがお前に言わないなら、それは言わなくても良いことなんだ。探る様な真似は良くないぞ。オレはな、お前がシユヴァを見て、どう思うかが大事だと思っぞ」

「?!っ！ だったらヤな奴よ！ じゃあ私行くから！」

ハチの事だから簡単に口を滑らせると思っていたのに、まさか説教されるなんてね。バツが悪くなった私はそう言い捨てると、ハチを残して大股で家路を急いだ。



「ホンっと、頭にきちやう！」

家に帰った私は、今日有った出来事を残さず打ち明けると、テーブルをドンと叩きつ

けた。

「そうかい？ 私はその魚人が間違つたことを言つてるとも思えないけどね」

向かいに座つて頬杖ついて聞いていたノジコは、私とは違う感想を持つたみたいね。

「なによつ。ノジコは魚人の味方をするつもり？」

「そうは言つてないさ。シュヴァの秘密が知りたいなら魚人が言うように自分で聞いて、確かめてみれば良いじゃない？ ナミは私と違つてアイツと接する機会が多いんだからね」

あんな奴のどこが良いのか分からないけど、多分ノジコはシュヴァに恋心を抱いてる。

それを私達に打ち明けないのは、ノジコ自身がそれを認めていないから。

一度、ノジコにシュヴァをどう思つて居るのか聞いてみた時に『アイツは支配する側で、私は支配される側……それだけさ……違うかい？』と話した切なそうな顔は忘れられない。

ホントならノジコの恋は応援したいけど、アイツだけはダメなんだから。

「はいはい。二人ともそれくらいにして御飯にしましょ。じゃーん！ ベルメール特製、子羊のステーキ、蜜柑ソース添えよ」

「はーい」

あの日からベルメールさんは少し変わった。

普段は私が悪さをすればゲンコツも落とす明るくて元気な、以前のままのベルメールさんだけど、魚人が絡むと少し違う。

ホントなら意地でも魚人に逆らい続ける様な人なのに、今は私とノジコの間で魚人の話題が紛糾しすぎると意図的に話を逸らすのよね。

全部あの日の伝言のせい……小さい頃は分からなかったけど、あの伝言は私を人質に取っていると言いたかったのよ。

だから、ベルメールさんは何も出来ない。  
でも、大丈夫だよ。

ベルメールさんは何も出来なくても、元気で生きていてくれるだけで私は幸せで、頑張れるから。

「いったただきまーす」

久しぶりに三人でテーブルを囲んで摂る夕食。

小さな幸せに浸りかけた、その時。

『ぷるぷるぷる……』

ぷるぷるぷる……ガチャ

ナミ、そこにいるか?』

幸せな気分を台無しにするように電電虫が鳴り響き、そこからシュヴァの声が聞こえてきた。

電電虫は東の海だと海軍が使用するくらいで、あまり流通していない。

それをアローン一味はどこから調達してきて、私の呼び出し用としてベルメールさんの家に置いていたけど、実際にコレが鳴ったのは初めてね。

「何の用？ 邪魔なだけだ」

席を立った私は、電電虫のマイクを握りしめ不機嫌を隠さずに言い放つ。

『悪いな、緊急事態だ。今すぐアローンパークに来い……………ガチャ』

一方的に要件だけ告げたシュヴァは、こっちの都合も聞かずに通信を切った。

「ちよつとっ!? なんなのよっ、もう!」

ホント、コイツってわけわかんない!

「行った方がよいよ、ナミ」

「そうね。電電虫の表情は真剣だったわ。何か……………良くない事が魚人達に起きたのかな」

夕食を中断して私の傍に立つ二人が揃ってアローンパーク行きを勧めてくる。

言葉だけ聞けば薄情にも思えるけど、二人とも心配そうにしてくれている。

「良くない事って……………? もしかして、強い海軍がやって来たとか!」

「それならナミを呼ぶ意味がないじゃない。アンタが行っても聞えないんだから」

私が抱いた希望の光は、ノジコが放った正論によって一瞬で潰された。

事実として私は聞えないからね。

「じゃあ、一体……何が？」

私は一応幹部だけど、海図を書くだけで一味の方針を決める場に呼ばれた事はない。

そんな私が行く必要がある事態………ダメ、分からない。

「分からない……けど、気を付けて行くんだよ」

魚人には逆らわない………どんなに理不尽で悔しくても、これが私達が選んだ闘い方。

呼び出しに応じない選択肢は最初からない。

ベルメールさんもノジコも、それが分かっているから私を変に引き止めて困らせたりしないのよね。

「うんー」

元気良く返事をした私は、子羊のステーキを掴むと一口で頬張り、『行儀悪いわよっ！』と叫ぶベルメールさんの声を背に、アールンパーク向かって駆けだした。



## 6話 ナミ t W O

「来たか、ナミ」

アーロンパークにやってきた私にいち早く気付き、声をかけてきたシユヴァの表情は真剣そのもの。

文句の一つでも言ってやろうと思っていたけど……これは、ただ事じゃないわね。

私は思わず身を引き締める。

煌々と灯りが付けられたアーロンパーク1階の広間に、ほぼ全ての魚人達が集まっているのも異例の事態。

あの日、ココヤシ村にやってきた時よりも数が揃ってるんじゃないかしら？

集まった魚人達の視線が床に置かれた大きな地図に注がれ、思い思いの表情を浮かべている。

床の地図にはいくつもの船の模型が置かれ、その内の三つがバツ印の上に置かれている。

それとあれは海賊旗？

嫌な予感がする……これは聞いた方が早そうね。

「来てあげたわよ。一体何事?」

コツコツと床を鳴らして歩き、シユヴァの隣に並び立った私は高飛車に尋ねる。  
魚人に囲まれているのは今でも怖いから、つつい虚勢を張ってしまうのよね。  
でも、癪だけどシユヴァの横なら安心。

コイツは無意味な狼藉なら、例えばアローンが相手でも認めない。

「商船が襲われた」

苦虫をかみつぶしたような表情を浮かべたシユヴァが短く吐き捨てる。

「は? 何よそれ!」

詳しく聞いてみると、三日前にゴザから出港した商船がしばらくして航海した後、海賊船に襲われ積荷を奪われた挙げ句、沈められた。

その数、3隻。

襲ってきた海賊船はそれぞれが違う海賊旗を掲げていた。

一つは、赤鼻が特徴的な海賊旗。

一つは、ハートマークの海賊旗。

一つは、猫がモチーフの海賊旗。

いずれも東の海で悪名高い海賊団ね。

「同胞は無事さ」

一通りの説明を受けた私にアールンが心配するなどばかりに言ってきたけど、そんなことはどうだって良いの。

「人間も乗って居たはずよ！ その人達はどうなったの!？」

魚人達は交渉がスムーズにいくようと、商船に人間を乗せている場合が多い。

船が襲われ沈められたというなら、乗っていたかもしれない人達の安否が心配。

そして、もしこれが、ココヤシ村の商船だったら……もしそこに、ベルメールさんやノジコが乗り合わせていたら……。

そう考えただけでも恐くなる。

「さあな。溺れ死んだか、殺されたか。自力で戻ってもこれねえような下等種族なんざどうだっていいさ」

アールンが心底どうでも良さそうに告げる。

「良くないわよっ！」

「そうだな………支配下の人間を殺されたんだ。黙っていたら俺達の面子に関わる」

一瞬でも、シュヴァアが同調してくれた!? と喜んだ私が馬鹿だった。

やっぱりコイツだって何にも分かかっていない。

「面子の問題じゃないでしょ!! 人が死んだのよ!! 襲ってくる海賊はアンタ達が蹴散

らすんじやなかったの!? 魚人は上等種が聞いて呆れるわね!」

「多勢に無勢だったんだ。そいつ等じや百を超える数は相手に出来ない。撤退して情報を届けたのは良い判断だ。お陰で敵がどこの海賊団か分かったんだからナ」

「敵? 三つの海賊団でしょ? 今頃どこかへ逃げてるに決まってるわ」

「違う。って、お前は知らないんだったナ。バギーとは海賊同盟を結んでいるから襲ってくる事はない。つまり、敵はバギーの名を騙る海賊団だ」

「わけわかんない。海賊が海賊の名を騙ってどうする……………あつ……………クリーク海賊団」

馬鹿な海賊達は自分達の悪名を轟かせたがる。

海賊旗を掲げて自分達は犯罪者だとアピールするのもその為ね。

そんな中で、海賊を騙る可能性がある海賊に私は心当たりがあった。

それが『騙し討ちのクリーク』。

過去には海軍船を装って略奪を行ったこともある、何でも有りの海賊団。

「そうダ。おそらく他の二つもクリーク海賊団ダ。アルビダや黒猫にしちやあ数が多すぎるからナ。そしてこれは」

「まだ襲ってくる……………」

シユヴァの言葉を遮って私は呟く。

敵をクリーク海賊団だと仮定して考えるなら、今回の襲撃は計画的なものになってくる。

三つの商船が偶然にも違う海賊団に襲われたと見せかけておいて、襲撃を続ける算段。

いえ、もしかしたら他の海賊団の仕業に見せかけて、アーロン一味と全面的に争うつもりかも知れない。

東の海で手広く商売するアーロン一味は、クリーク海賊団から見て目障りな存在になつてきているのよ。

「さすがに理解が早いナ。敵がクリークで計画的に襲つて来ているなら、この海域の何処かの島に奴らの前線拠点があるはずなんだ」

棒の様なモノを手にしたシユヴァが、コノミ諸島の東側の海域を円を描くようにして指し示している。

「それを私に割り出せつてことね？」

自然と海図を頭の中に思い描く。

シユヴァが指す辺りはいくつもの無人島があつて、確かに海賊が拠点を作るには打つてつけの海域ね。

襲撃を受けて戻つてきた魚人達から詳しく時間と場所を聞いて、潮流の関係を考えて

探っていけば、敵がどの島から出航してきたのか割り出すのはそう難しい話じゃない。って、ダメよ。

どうして私が魚人達の味方をしないとイケないのよ。

敵はクリーク海賊団？

それがどうしたっていうの。

つぶし合って両方とも死んでくれたら万々歳じゃない。

「出来るか？ これはココヤシ村の為にもなる」

共倒れを願う私を見透かしたように、シュヴァはココヤシ村の名を口にする。

言われた私は氣付いてしまう。

このまま私が何もしなければ、アーロン一味の商船がまたクリーク海賊団に襲われるかもしれない。

そして、アーロン一味の商船とはこの島に住まう人や、ココヤシ村の皆が乗る船のことだ。

「アンタって、ホンっ……とやな奴ね。良いわよ、やってやろうじゃない！ アンタ達とは頭の出来が違うのよ！ 直ぐに割り出してやるから、きつちりカタを付けてきなさいよ!!」

「さすがは我らが優秀なる測量士だ！ 聞いたか、同胞達よ！ 舐めた真似をしてくれ

た下等な人間共は必ず見つけ出して……殺す!!」

私達の話の聞き耳を立てていたアーロンが立ち上がって両手を広げ、煽られた魚人達  
が大きな歓声を上げている。

アーロンに持ち上げられても嬉しくないし、人間を下等って言うなら出し抜かれてん  
じゃないわよつ。

まったく、いい迷惑だわ。

でも、やらないわけにはいかない私は、アーロンパーク内に作られた部屋で割り出し  
作業にとりかかった。



明けて翌朝。

私はシヴアとクロオビ、名前も知らない魚人達と中型の船に乗り込んだ。

「つて、なんで私が乗らなくちゃいけないのよ!」

「調査だ口? お前が行かなくてどうすんだ」

「安心しろ。幹部が二人も居る。いや、お前も幹部だから三人だ」

地団駄を踏んで切れてみたけど相手にもされない。





おかげでバギーを潰せなくなったとボヤキ気味にシユヴァは言う。

「だから、どうしてソレを教えてくれないのよ。私って一応幹部なのよね!」

「ん? なんダ? 本気でアーロン一味に入りたくなつたの力?」

「えっ……? 本気も何も私は今でも立派なアーロン一味の幹部じゃない。冗談は辞めてよね」

「そうカ……まあ、そういうことにしておくカ」

そう言つて、少し寂しそうな表情を浮かべたシユヴァはそのまま口を噤んだ。

コイツ……もしかして、私が本心ではアーロン一味に入っていないって気付いているの?」

でも、それを咎める風な素振りには全く見せない。

どちらかと言えばクロオビの方が私に対して懐疑的。

ぎぎぎー……

ぎぎぎー……

誰も話さなくなつた甲板で静かな波の音だけが聞こえる。

「ねえ………アンタはどうしてアーロン一味に居るの?」

「いきなりだナ? まあ、別に大した理由じゃない。やりたい事を成し遂げる為にはアーロン帝国が必要なんだ……それだけだ」

「大した理由じゃない!? やりたい事をやる為ですつて!? 巫山戯ないですよ! そのア  
ンタの身勝手な理屈のせいで私達がどれだけっ」

「ココヤシ村の連中は死んじやないだろ?」

悪びれなく、いえ、むしろ自慢気に言い放つシユヴァ。

もしかしたら、本当にもしかしたらただけど、コイツは何か事情があつてアールン一味  
に加担してる? と、淡い期待を抱いた私が馬鹿だった。

やっぱりコイツは何にも判っていない。

確かに人は死んでいない。

死んでないけど、私達はコイツらの支配なんか望んでいない。

コイツは根本的な事を判っていない。

「あっそ」

話すだけ無駄と悟った私はそれだけ言うのと、そっぽを向いた。

「そういや、オレも一つ聞きたい事がある」

「……何かしら?」

「もし俺達が人間だったたら、村の連中はここまで抵抗したと思うか?」

「……っ!?!」

シユヴァの問いかけに私は息を呑む。

アーロン一味が人間だったら？

考えた事もなかった……でも、どうなんだろう？

いえ、もし人間の海賊だとしても、私達は自由が欲しいんだから抵抗するに決まってるわ。

でも……………。

「なによそれ？ 人間なら抵抗しないって言ったら、あんた達は人間になってくれるの？ 有り得ない事を聞かれても困るんですけどっ」

胸の奥がモヤモヤした私は、はぐらかすような答えを喧嘩腰に返した。

「ん……………そうか。まあ、そうだな。俺達は魚人だ……………それは変わらない。変な事を聞いて悪かったナ」

なんなんだろう？

自分に言い聞かせる様に呟くシユヴァはどこか哀しげに見える。

「……………良いけど。私、寝るからっ。徹夜で疲れてるのよ」

目的の海域までは時間がかかる。

実際に眠気もあった私は、シユヴァに寄り掛かると眠りに就いた。

## 7話 ナミ three

「着いたゾ。起きろ、ナミ」

「ン……………」

シユヴァに揺り起こされた私は、眠い目を擦って空を見上げた。

太陽が南天に差し掛かっている……結構な時間眠っていたみたいね。

「んっ??…??…??」

両腕の上に伸ばし伸びをしていた私は、揺れの少なさから船が停泊している事に気が付いた。それに、なんだか喧騒のような声も聞こえてくる。

嫌な予感しかないんだけど、確かめない訳にもいなくて、船縁に手をかけた私は周囲の様子をソツと窺った。

私の視線の先。

小さな入江に作られた木製の棧橋。

そこに様々な海賊旗を掲げた船が停泊している。

そして、武器を手にした無数の海賊達が陸の上から罵声を浴びせてきていた………。

「馬鹿じゃないのっ!?　なんで正面から堂々と乗り込んでんのよっ!」  
信じらんない……。

百を越える数は相手に出来ないって言ったのはシュヴァアのはずよ。それなのに、なんで五百を優に超える数に見つかってんのよっ!?

こっちはシュヴァアにクロオビ、それと名前も知らない魚人が六人。私は闘えないから たったの八人で相手にしないといけないって判ってるのかしら?

一人辺りにしたら百よりは少ないけど、まともに闘える戦力差じゃないわ。

調査って言うから付いて来たのに、これじゃ話が違うじゃないのよ。

「どうする、シュヴァア?　クリークとやらは此処には居ないようだぞ」

「やつぱりか……まあ、俺に任せろ。プランAは破棄、プランBでやるゾ」

「おれも行った方が手早く終わるのではないか?」

「いや、俺のきお……調べが正しいなら、何人か厄介な奴が居るはずだ。そいつらが姿を見せない内はナミを無防備には出来ない」

私が寝ている間にある程度の作戦を立てていたみたいで、キレル私を無視したシュヴァアとクロオビが簡単に打ち合わせを済ませた。

プランAやBがどんな内容か知らないけれど、シュヴァアって次善の策とか考えるのが好きなのよね。

「飛ぶぞ」

私を小脇に抱えたシユヴァが甲板を蹴ると、フワリと浮き上がって岸边に着地。船に残ると危険なのは判るけど、荷物の様に扱うのは止めてほしいわ。

クロオビ達もシユヴァに続いて岸边に跳び移る。

そして、名前も知らない魚人達が私を中心に円陣を組んで取り囲み、クロオビがその一歩前で腕を組んで陣取った。

「行ってくる、ナミは任せタ」

「おう」

散歩にでも向かうような気軽さで、シユヴァがクリーク海賊団の元へと歩いて行く。

—— やっちまえーっ！

たった一人のシユヴァの元、武器を振りかざしたクリーク海賊団員達が群がるように襲いかかった。

「嘘……でしょ……!?!」

シユヴァが何をしているのか、遠目で見ていても私には分からない。

ただ、アイツが海賊達の間を流れる様にすり抜けるとバタバタと倒れていく。

クリーク海賊団だって馬鹿じゃない。

正面から誰かが斬りかかる時には、必ず背後からも誰かが斬りかかっている。

それなのに、シユヴァはまるで知っていたかの様に淀みなく、軽やかに全ての攻撃を避けている。

「スゴい……」

違うわ。

自然と感嘆の声が漏れたけどそうじゃなくって、これはマズイのよ。

武器を持ったクリーク海賊団が相手にもならないなら、ろくな武器を持たない村のみんなじゃもつと相手にならない。

【私はアーロンよりシユヴァが怖い】

【今はまだ弱っちいけど、その内手がつけられなくなるわ】

いつだったか……そう、あれは一年間生き延びる事が出来た記念に開いた、ささやかな祝いの席。

珍しく酔ったベルメールさんが言っていた言葉を思い出す。

それから五年。

シユヴァは本当に手が付けられない化け物になっている。

「た、助けてくれ……お、おれ達はもうあんた達を……」

ふと気が付くと、背後から声がある。

お腹を押さえたバンダナの男が、よろめきながらこちらに近いて来ていた。

何なのこいつ？

シユヴァの攻撃を受けてここまで逃げて来たの？

いえ、そんなわけではないわ。

クロオビが見逃すはずないもの。

「……………絶対に許さねえっ！」

——ドカツ！

私がヤバいっ、と思うと同時にバンダナの男が鉄球付きのトンファーで、私の近くにいた魚人を文字通りに殴り飛ばした。

そして、次は私とばかりにギロつと睨んだバンダナの男がトンファーを振りかぶる。

「ちよつと待ってよ!？」

こんなので殴られたら死んじゃう。

私は……こんなところで死ねないのにつ。

目を瞑った私は衝撃に備える。

——バキッ！

鈍い音が聞こえた。

でも、痛くない？

恐る恐る目を開けてみる。



「ほう……少しは手応えのある人間もいるということか」

「クロオビっ……!」

私とバンダナ男の間に割り込んだクロオビが、肘にあるヒレで鉄球を受け止めている。

「下がっている、ナミ」

言われた私がクロオビから距離を取ると、名前も知らない魚人達も同じように付いてきて円陣を組む。

これってやっぱり守ってくれてるのよね……。

私を同胞だと思っているから？

いいえ、違うわ。

コイツらは単に私が書く海図が欲しいだけっ。

「エイっ!」

私が自問して自分に言い聞かせている間に、クロオビとバンダナ男の闘いが始まっている。

正拳突きを放つクロオビ。

それを変な体勢でかわすバンダナ男がトンファーを振り回し、クロオビは其を肘にあるヒレで受け止めているけど辛そうね。

これってもしかしくなくてもクロオビが押されてる？

このまま死んでくれたら万々歳………って、私はいつから人の死を望むようになっちゃったんだろ？

アーロン一味の支配は絶対に嫌だけど、私はこんな自分も嫌なんだと思う。

早くアーロンの支配から抜け出して、心の底から笑える様になりたい。

その為にも私はこんな所じや死ねないのよ。

なんとか………なんとかしないと………。

でも、どうやって？

私の方じや二人の闘いに割って入ることなんて出来っこないわ。

「クロオビ、交代だ。ソイツを殺せる位でないと、俺が困るんだ」

「シユヴァっ！」

いつの間にか、集団を相手にしていたハズのシユヴァが私達の元へと駆け付けていた。

「よく判らぬ事を………だが、任せた。行くぞ！」

私だけじゃなく、クロオビもシユヴァの言いたい事が分からなかったみたい。

ただけど問答する時間が惜しいと思ったのか、クロオビは魚人を三人引き連れるとシユヴァが相手していた集団の方へと走って行った。

「お前はソコから動くな。俺が守つてやる」

そう言ったシユヴァがバンダナ男へと攻撃を仕掛ける。

でも、なんだろう？

さつき下つ端を相手にしていた時よりシユヴァの動きがぎこちない。

避けてはいるんだけど、余裕がない。

——バキッ！

バンダナ男の鉄球がシユヴァの顔面を捉えた。

吹き飛んだシユヴァが、私の足元で大の字に倒されている。

「だ、大丈夫なの？」

「なんだ？ 心配してくれるのか？」

「だ、誰がアンタの事なんか……って、全然平気そうね」

頭の辺りに逆手を置いたシユヴァは、全身をバネの様にして軽やかに起き上がる。

「タフだつて事を忘れていただけだ。わざわざ避ける必要がなかった、つて事だ」

「何よそれ？ わけわかんない」

「大体判つたし、すぐ終わりにする………持つて口」

何が判つたのか分からないけど、そう言ったシユヴァはリュックを脱ぐと、ソレを押し付ける様に私の方へと預けた。

「あ、アンタ……それ……」

リュックを脱いだシユヴァの背中に光る黒いヒレ。

シユヴァは人間かもしれない。

勝手だけど、私や島の人達はそんな風に考えていた。

裏切られた。

何故だかわからないけど、私はそう思った。

「お？ シユヴァのヤツ、本気か？」

私の近くに残っていた魚人が、シユヴァを見て声をあげる。

特に驚いた風でもないところをみると、この魚人達はシユヴァが魚人だって知ってい

たみたいね。

「ね、ネエ……シユヴァって何の魚人なの？」

シユヴァが魚人なのは、もう間違いない。

出来るなら何の魚人なのか確認しておきたい。

もしもサメなら強さの裏付けになるわ。

「アイツは魚人じゃねーよ」

「半魚さ。父親だか母親だかが人間だって話さ」

「海王類を除けば最強の海洋生物、シャチの半魚人だな」

ペラペラと話す魚人達。

話した事も、話の内容も意外だった。

「えっ……？ シャチって魚じゃないわよね？」

「そうだったか？ まあアイツはアイツだ」

「違えねえ。何だっつかまわないさ」

「アイツは俺達の同胞だからな」

疑問に思う私がおかしいのかしら？

名前も知らない魚人達は、シユヴァがシャチでも全然気にしていないみたい。

「これで、終わりだっ！」

私がホンの少し魚人達と話している間に、シユヴァはバンダナ男を追い詰めていた。

至近距離で鳩尾を殴られたらバンダナ男は、そのまま力なくシユヴァにもたれ掛かっ

た。

勝負アリ……って、とこかしら？

バンダナ男を肩に担いだシユヴァは、乱戦を続けているクロオビ達の元へと向かって

行く。

シユヴァがバンダナ男を戦場のど真ん中に投げ捨てると、乱戦が収まる。

そこで何かを話したかと思うと、シユヴァとクロオビ達は戦闘を止めて戻ってきた

わ。

「引き上げるゾ」

「殺さなくて良かったのかしら？」

戻ってきたシュヴァアにリュックを手渡しながら、私は虚勢を張った。

実際のところもクリーク海賊団の下っ端達は、倒れているだけで死んでない様に見える。

「ん……………？ そうだな。あんな下っ端をいくら殺したところで意味はない。頭を潰さないといくらでも湧いてくるからナ。だから、決戦を申し込んだ」

「決戦って……………信用できるの？」

「勿論ダ。俺はクリークが信用出来ない男だつて事を信用しているからナ」

そう言つて不敵に笑うシュヴァア。

私はそんなシュヴァアが……………怖かった。



それから。

アーロンパークへと戻ったシュヴァアは、クリーク海賊団に決戦を持ち掛けた事を報告

すると、その日はアールンパークの守りを固める様に進言したわ。

騙し討ちのクリークなら適当に兵力を割った上で、主力をアールンパークの略奪に、もう片方を囷として決戦の地に向かわせるだろうと読んだのよ。

そして、その読みは見事に当たった。

決戦の日。

巨大ガレオン船を中心に船団を組み、コノミ諸島へと大挙してやってきたクリーク海賊団。

兵の数ならクリーク海賊団が圧倒的に有利だったけど、待ち構えていた魚人達は岸辺に接舷する前に大半の船を沈めた。

アールンパークに上陸出来たのは、意図的に攻撃しなかった旗艦であるガレオン船と運良く攻撃から逃れた数隻のみ。

舐めた真似をしたクリーク本人を確実に殺す為のアールンの計画。

ガレオン船から降りてきたクリークはアールンが。

バンダナの男はハチとチュウの二人で、盾男はクロオビが担当する形で闘いが始まった。

どの闘いもアールン一味が有利。

形勢が悪いと見たクリークは起死回生を狙って毒ガス弾を使用したけど、これさえも

シユヴァの読み通りだったわ。

クリークが毒ガス弾の発射を宣言するなり、魚人達は海中へと避難してやり過ぎたの。

『兵力を整えたらまた来てやる!!』

そう言い残したクリークは、アローンパークから逃げ帰った。

多分だけど、クリークは決戦の地に向かわせた囮部隊と合流すれば、直ぐにも船団を再編成出来ると思つたのでしようね。

だけど、そうはいかない。

決戦の地にはシユヴァが一人で向かつていた。

信じられないけど、例えクリーク海賊団の全軍が来たとしても、返り討ちにするだけの自信がシユヴァにはあつたみたい。

その翌日。

私の元に届いたニュース・クーがそれを証明する。

そこにはアローン一味とクリーク海賊団の決戦の情報をキャッチし捕縛に向かった海軍支部が、クリーク海賊団諸とも壊滅したと書かれていた。

ヒラリと落ちる手配書が一枚。



【千人殺しのシュヴァア】

【懸賞金・1200万ベリ】



決戦の日から3日。

シュヴァアはまだ帰らない。

私は一人、海岸線を眺めて物思いに更けていた。

『たった一人で決戦に向かい、まだ帰らない』

私からそう聞いたノジコは、心配を隠そうともしなかつたわね。

一体あんなヤツの何処が良いのかしら？

アイツは魚人で、私達を支配して苦しめる張本人アーロンの右腕なのよ。

なんでも話すと約束した間柄だし、シュヴァアが魚人だつて事をノジコに伝えるべきなのは分かつてる。

でも、言いたくない。

私が伝えたら、ノジコは心の整理をつけてしまう。

だが、そんなこととしてやるもんですか。

アイツが自分で魚人だって伝えて、戸惑うノジコを相手にあたふたすれば良いのよっ。

「だから……早く帰って来なさいよね」

——バシヤ!

私が眩いたその時、何か海から跳び出てきた。

「あ、アンタ、生きてたの!?! って、もしかして泳いだきたとか言わないわよね?」  
シユヴァだ。

全身ずぶ濡れだけど、リュックを背負ったいつもと変わらない姿のシユヴァが立っていた。

そう……こいつは何も変わっていない。

変わったのは私の見方のほう。

「ああ、意外に時間が掛かるもんだナ」

「呆れた……そりゃあ、そんなリュックなんか背負ってたら時間も掛かるわよ。捨ててくれば良かったのに」

「ふざけ口。これは俺の宝ダ。それよりアールンパークの鬪いはどうなつタ?」

「ここまで泳いで戻ってきたシユヴァは、あの日の顛末を知らない。」

私はいつまんであの日のあらましを教えてあげた。

「……………つて感じで闘いは私達の勝ちよ。でも、クリークには逃げられたわ」

「ちっ……………これも運命さだめカ」

「あ、待ってよ！ ノジコのとこにつ……………つて、あ???もうっ！」

私が話しているのに、何かを呟いたシュヴァはさっさとアールンパークに向かって駆け出した。

仕方がないから追い掛けたけど、全然追いつけるわけもなく、結局私はアールンパークまで走る事になった。



「ビビってんじゃねーゾ！ アールンっ!! 俺とあんたの二人なら、アイツらにだって勝てるっ！」

「いっばしの口をきくようになったじゃねえか、シュヴァ。だがっ！ 誰がビビってるだア!?!」

「お前だっ、アールン!!」

どうなってるの!?!

私がアールンパークに付くと、シュヴァとアールンが殴り合っていた。

「ね、ねえ、どうしたの!？」

一瞬、シユヴァが反旗を翻した!?

とも考えたけど、他の魚人達が黙って見ているんだからそれはなさそう。

クロオビの元に駆け寄り事情を聞いてみる。

「ナミ、か………これはアーロンさんとおれ達魚人の問題だ。人間のお前が口を挟むことではない。今日のところは帰れ。ハチっ、送って行ってやれ」

「ういゝつす」

ハチに首根っこを掴まれた私は、追い出される様に蝸壺に放り込まれると、ココヤシ村に返された。

結局、何が理由でアーロンとシユヴァが殴り合っていたのか分からない。

口が軽い名前も知らない魚人達に聞いてみても、これに関しては何も話してくれない。

ただ、この日から私のアーロンパークでの行動は制限されるようになった。



決戦の日

あれから2年が過ぎた。

表面上は何も変わっていない。

アーロン一味に法外な貢ぎ金を払う為に働き続ける毎日。

私のやることも変わらない。

お金を、貯めてココヤシ村を買い取るのよ。

少し違いが有るとすれば、あの日を境に魚人達は身体を鍛えることが多くなった。

そして、シュヴァはこの時期がくれば長期の間、アーロンパークを留守にするようになった事かしら。

今、シュヴァは居ない。

だからと言って反乱を企てる人はもういない。

正確に言うならもう居なくなった、ね。

儲けても儲けても半分取られる。

それに我慢が出来なくなったゴザの町の一部の人達が、シュヴァが居ないと知って反乱を起こしたの。

でも、アーロンが反乱なんて許すハズもない。

赤子の手を捻るように簡単に鎮圧されたわ。

一部の金に目が眩んだ人達の巻き添えで、ゴザの町は見るも無惨な姿に変えられた。

魚人に逆らっても殺されるだけ。

武力に訴えても無駄……そう再認識した私は、アーロンとの契約を信じて盗賊家業に励んだの。

そんなある日。

私はバギー海賊団に潜入した。

バギーは非道で知られる海賊団だけど、万が一盗みがバレてもアーロン一味だって刺青を見せてやれば逃げられる。

そんな打算が私には有った。

そこで出逢った麦わら帽子の海賊。

最初はカモにしようと思っていたけど、彼等と過ごしていると、私は自然と笑う事が出来た。

気の良い人達。

そして、信じられない位の強さ。

でも、それは人間にしては、って言葉が頭に付く。

ルフィやゾロがいくら強くたって、多分シユヴァには敵わない。

助けて！

そう言いたくなる言葉をぐつと呑み込んだ私は、敢えて彼等を酷く傷付ける形で、船から降りた。

だけど、私はルフイ達の人の善さを甘く見ていた。私を仲間だと言って追い掛けて来てくれた。

涙が出るくらい嬉しい事だけど、無理なのよ。

人間では魚人には勝てない。

大丈夫だから放っておいて。

何も根拠がなくて言ってるんじゃないの。

顔を腫らせたシユヴァはあの日、言ってくれたの。

『悪い様にはしない。余計な事はしてくれるナ』

だけど、

……

……

……

海軍が私のお金を奪っていった。

悪い様にはしない？

コレがあんたのやり口なの、シユヴァ!?

ノジコだつて傷付いた。

こんなの、あんたの言う悪い様にはしないなの!?

それからの私は、自分でも何をどう動いたのかよく覚えていない。

多分、アーロンの元へ行って抗議し、ルフィに向かって怒鳴り散らし、村のみんなの反乱を防ぐ為に作り笑顔を浮かべて見せたと思う。

でも、止められなかった。

きつと皆死んじゃう。

シユヴァが留守でもアーロンが居る。

魚人の強さは変わらないのよ。

気付けば私は、自分の肩にあるアーロン一味の刺青をナイフで突き刺していた。

「ルフィ……助けてっ」

ナイフを握る私の手を掴んだルフィに、私は……助けを求めた。

「当たり前だあっ!!」

そう叫んだルフィが麦わら帽子を私に被せてくれる。

何の変哲もない麦わら帽子。

だけど、ルフィはこれを宝と言って大事にしている。

麦わら帽子を深く被った私は、ルフィの真っ直ぐな優しさに涙が流れた。

そうして暫く泣いた私は、思い出した。

『ふぎげ口。これは俺の宝だ』



シユヴァのヤツも何時いかなる時でも背負っていたリユツクをそう表現していた。それをアイツは私に預けてくれた。

そうよ。

シユヴァは私に宝を預けてくれた。

「……止めなきやつ」

私が村の皆を第一に考える様に、アイツは他の何を犠牲にしてもアールン一味を第一に考える。

きつと、それだけなのよ。

犠牲にされる方としては許せる事じゃない。

だけど、きつと何かある。

もしもこのままアールン一味を倒しても、シユヴァが私達を許さない。

そうなれば、今よりもっと哀しい事になる。

「みんなっ、無事でいて！」

私は祈る様な気持ちでアールンパークへと駆け出した。

## 8話 シュヴァとハンコック

「シャッキー、SぼったくりBAR」

ここは、シャボンディ諸島、13番グローブ。

相変わらずのふざけた看板を掲げた店が見える。

2年前のある日。

ひよんな事から、泳げば魚人島に帰れるんじゃないやね？ と気付いた俺は、母さんの命日に合わせて墓参りをするように成っていた。

今回で3回目。

距離的、地形的、時間的に無理だと諦めていた魚人島への里帰りも、カームベルトを突っ切ればなんとかなる。

今の時期、アローンパークを離れる事に気がかりがないと言えば嘘になるが、墓参りが可能と判明したからには、欠かすわけにはいかないだろう。

それに、離れても良いだけの準備はしてきた。

半壊させたクリーク海賊団は、最近になって兵力をあの時以上に整えたとの話もあったが、アローン一味に仕掛けて来ることなく偉大なる航路グランドラインに入ったとの情報を得てい

る。

ナミには余計な真似をしてくれるな、と釘を刺しているしこつちも問題はないだろう。

薄れつつある漫画の記憶を参考にすれば、ルフィ個人に俺達を攻撃する理由はなく、あくまでもナミの懇願あつての戦闘だからな。

アーロンとも今後の一味の在り方の話し合殴り合いいは済ませてあるし、後は粛々と支配をこなし金を集め、目的の物を揃えるだけだ。

つて、なんだ？

客が居るのか？

バーのドアノブに手を掛けた俺は、シャツキーともレイリーとも違う気配が店内にある事に気が付いた。

見聞色の覇気と呼ばれるこの力。

母さんはこの力で読心術に近い事が出来たらしいが、俺は気配や殺気を読み取って闘いに活かすことにしか使えない。

本来であればこの力は、誤解なく判り合う為のモノだろうに、これではまるで闘いに特化した新人類だな。

「邪魔をする」

自嘲気味に笑った俺は、そのままドアノブを捻ると店内へと足を踏み入れた。

「いらつしやい。あら？ シュヴァアちゃんじゃない。墓参りかしら？」

「ああ、そんなとこだ。つて、あんた……あの時の？」

身ぐるみ剥がされ希望者かと思いきや、店内に居たのは黒髪の美女と、その背後で隠れきれしていない全体的に大柄な二人の女性。

その特徴的な構図と組み合わせから「あの日」このバーで見かけた少女達の成長した姿だと直ぐに気が付いた。

「そ、そなた、あの時の子供か？ 大きくなったものよ」

来客に備えて警戒していたのか、カウンター席から立ち上がっていた成長した彼女も又、俺に気付いた様だ。

目を丸くさせて驚いているが無理はない。

あの当時の俺は彼女の腰ほどの背丈しかなかったのが、今では逆に俺が見下ろす程になっっている。

成長し過ぎた感は否めないが、今のところは日常生活に不便はない。

「あんたの方は美人になったもんだな。正に絶世の美女つてやつだ。そういや、あん時は礼も言えずに悪かったな。ありがとう」

ここであの時のハンカチを返せば良いのだが、ハッキリ言って何処にやったか覚え

ていない。

てか、こんな風に再会するなんて考えてもいなかったからな。

まあ、彼女達の小綺麗な身なりからも、元気に生きていたと伺い知れるし、なによりだ。

「あ、姉様を前にして自然体なんてっ」

「ん？ そりゃまあ、俺って半分魚人だしな。あんたの姉さんの事は美人だと思うが、人の見た目でどうこうつてのはあんま無いんだ。気を悪くしたか？」

ここまでの美人を前にしたら、男なら舞い上がってもおかしくない。

言い方を変えるなら、黒髪の美女はチャホヤされるのが当たり前だろう。

もしかしたら俺が普通過ぎたことに気を悪くしたのかも知れないと考える。

「そ、その様な事はないぞ」

「そうか？ だったら良いんだ。隣、座っても？」

俺の考えは杞憂だったようだ。

黒髪の美人は特に怒る事なく、どちらかと言えば……怯えてる？

なんだ？ この感覚。

黒髪の美人とその妹達からは、あまり感じた事のない気配を感じるんだが、良くわからない。

これだから中途半端に感じるのは困るんだ。

「知らぬ仲でもないし、特別に許可してやろう」

俺が戸惑っている、先客である彼女は何故か急に偉そうになつて頷いた。

情緒不安定なのか？

それを見た俺はとりあえず、ハンコックの左隣に一つ席を開けて腰を下ろした。

「フフフ。シュヴァアちゃんもハンコックちゃんも滅多に此処にはこないのに再会出来るなんてね。人の縁というのは不思議なモノだわ」

そう言つて酒を置くシャツキー。

レイリーの拘りなのか、何気にここの酒は旨い。

このバーはぼつたくりと言うよりか、高級酒取扱店なんじゃないかと俺は思つてる。

それを知らない馬鹿な連中が請求額を見て暴れるから、シャツキーに身ぐるみ剥がされる羽目になるつて寸法だ。

「そうだな……つて、ハンコック？　もしかして、あんたつあの海賊女帝、ボア・ハンコックか!？」

王下七武海の一部、ボア・ハンコック。

偉大なる航路に名を轟かせる超有名人だが、その容姿を示す写真は広まつておらず、あの時の少女がボア・ハンコックだったなんて思いもよらなかつた。

「というのも俺は、あの時彼女達が何故バーにいたのかも知らなければ、名前すら知らない。」

「勿論、後からシャツキー達に話を聞けば良いだけの事だが、何か事情があつて彼女達がここに居たというのは俺にでも判る。」

「探るような真似は良くないし、俺が知るべき事柄ならシャツキーやレイリーから話がある。」

「それが無いってことは、俺は知らなくて良い、もしくはペラペラと話す事ではないという事だ。」

「しかし、まあ……海賊女帝ハンコックはつきり厳ついババアかなんかだと思つていたが、華奢に見えて大したもんだ。」

「ドレスの隙間から見える脚なんか、モデル顔負けの細さと美しさだ。」

「シユヴァちゃんどどつちが強いかしら?」

「頬杖突いたシャツキーが、イタズラっぽく笑っている。」

「こんな風に笑うって事は、黒髪の美女が七武海のハンコックとの見立てで間違いない、しかも俺の方がやや弱いという事か。」

「まじでかつ!? ジンベエ以外の七武海もそんな強いのか? 勘弁してくれよ……」

「この世界、化け物多過ぎだろ」

最近になってジンベエとまともに闘えるレベルに達してきた俺は、自惚れる訳じゃないがそれなりに強いとの自負がある。

そして、懸賞金的に考えても元の懸賞金が2億越えのジンベエは、七武海の中でも強いハズだと考えていた俺にとって、元の懸賞金が1億足らずのハンコックでさえ強いとの事実は、少なからずショックな事実だ。

海軍の三大将は勿論、本部大佐以上の一部海兵。

新世界の四皇とその幹部。

更には王下七武海まで俺より強いとか、一体俺は後どれだけ強くなれば良いのやら。げんなりした俺はカウンターの上に突っ伏した。

「ぶ、無礼なっ」

「悪い悪い。綺麗な女性を捕まえて『化け物』はなかったな。俺はシュヴァ。今は東の海で海賊・アーロン一味の幹部をやってる」  
イーストブルー

「わ、わらわはアマゾンリリーの皇帝にして、七武海の一人、ボア・ハンコックじゃ」  
身を起こしてハンコックと握手を交わした俺は、続いて彼女の妹達というサンダーソニア、マリーゴールドとも軽い挨拶を交わした。

「んでさ、いきなりで悪いんだけど、あんた……いや、ハンコックが七武海なら俺に手を貸してくれね？」



ここで再会出来たのも何かの縁。

しかも七武海とくれば相談事を持ち掛けない手はないだろう。

「藪から棒になんじや？ 内容にもよるが聞いてやっても良いぞ」

「天竜人を皆殺しにしたい。あんなクズ共が天を騙つてのさばってるのは我慢ならねえ！」

一瞬で熱くなった俺は、ジョッキを握った手をカウンターに叩きつける。

ダメだな。

クールに成らなきや駄目だと判っていても、あのクズの事を考えたら頭に血が上る。

母さんの事があつたからだけじゃない。

シャボンデイに暮らせば嫌でもアイツ等の傍若無人ぶりは聞こえてくる。

なんであんなのが生きていられるのか理解に苦しむ。

そもそも天とは、偉大な男が目指したモノであり、断じてあんなクズが騙つていいものではない。

「そ、そなた正気か？」

「あら？ アーロン帝国はどうしたの？ 国を揚げて世界政府に戦争を仕掛けるんじやなかつたの？」

瞬間湯沸し器のごとく熱くなった俺を見たハンコックが、若干引ききみになってい

る。

「シャツキーの方は俺が子供の頃に語った事を覚えていたようで、面白そうに見ている。」

「それ、な……出来れば天竜人を守り支える世界政府ごとぶっ壊したかったけど、そりや不可能だつて気付いたんだ。無理やり支配は出来ても、俺達の為に命を張つて兵士になる人間はいない。人間は魚人の風下には入りたくない……それが本能みたいだ」

「あ、姉様……この男、メチャクチャよ」

「マリーゴールドには呆れられたようで、確実にドン引きされている。」

「これはマズいな。」

「もう少しフレンドリーにいかないと、ドン引きされたままじゃ交渉どころじゃないぞ。」

「笑えるだろ？ 6年だ。人を傷つけ、怨みを買って、気になる女にも手を出せず。それでもちゃんとしてりやあ支配者として認められる。そう信じてやってきたけど根本的に無理だった、つて話さ。6年かかってそれに気付いた」

「だから世界政府の打倒は諦めて、天竜人の殺害に狙いを絞るつてことかしら？」

「いや、元々俺の目的は天竜人だし。中途半端にひよつてねーし。世界政府の打倒も、アーロン帝国もその為の手段だし。それに、この8年だつて無駄じゃない。幸い金は十

二分に貯まつてるからな。後はクズな海軍准将殿から横流し品の武器を調達するだけってトコまで来てる」

横流し品の海楼石。

こいつの数を揃えるのに苦労している。

金に目が眩んだ准将殿が出し渋って値を吊り上げようとしている可能性もあるが、悪魔の実の能力者が少ない東の海では、海楼石は無用の長物、猫に小判。

それを東の海で調達して横流すんだから、本当に金と手間と時間がかかっているのが実情だろう。

「ほ、本気のようにじゃな。それで、わらわが手を貸すと言えば、何をさせようと言うのだから？」

「別に大した事じゃない。聖地マリージョアの中の様子が知りたいだけさ。七武海なら聖地に行くこともあるだろう？ 闇雲に攻めてもターゲットに逃げられる。チャンスは一度きりだと思ってる。たった一度のチャンスで、天竜人を皆殺すっ!!」

聖地を襲撃して奴隷を解放しただけのタイガーでさえ、あれだけ執拗に狙われて命を落とす。

中途半端に天竜人を殺せば、その後で確実に殺される事になるだろう。だからチャンスは一度切り。

一度のチャンスで確実に仕留める為にも、聖地マリージョアの情報は不可欠だ。

天竜人の人数と住居にはじまって、建物の配置、護衛の数、海軍への連絡ルート、等々。どごその海兵を買収して情報を得ないといけないと思っていたが、ハンコックが七武海で尚且つ協力してくれるなら、実に有り難い。

「中々面白い話をしておる」

「っ!?! レイリーか。まさか、止めるつもりか?」

声がしたので振り返ってみると、いつの間にかレイリーが立っていた。

くそっ。

今日も気付けなかった。

俺はかなり腕を上げたハズなのに、レイリーの気配絶ちに気付けない。

これがそのまま俺とレイリーの実力差。

レイリーの背中が見える位には強くなったと考えていたが、まだまだ遠い存在ってことか。

これで世界最強の称号は別の男が持つてって話だし、ホントに勘弁してほしい。

「止めはせんよ。君が決めて君がやることだ。だがな、シュヴァア君。天竜人を殺せばどうなるか、君は知っているのかな?」

俺が内心でブー垂れている内にレイリーが左隣に腰を下ろした。

「海軍大将がやってくる……つて意味じゃ無きそうだな。殺せばどうなるか、か……」なるほど。

確かに考えてみればおかしな話だ。

天竜人には、あれだけの傍若無人な振る舞いが出来るだけの理由が有るってことか？  
単に世界政府の開祖の末裔位に考えていたが、それだけじゃないのか？

「君がそれを知った上でも尚、行動を起こすというなら止めはせんよ。だが、何も知らずに血気に逸る姿を見ているのは少々忍びない」

「レイリーは其を教えてくれないのか？」

「私を知るのは、私達の答えだ。それが正しいとも限らなければ、君が同じ答えを出すとも限るまい」

「自分で探せってか」

時折、レイリーは面倒な言い回しをする。

付き合いがそれなりに長い俺は、レイリーが言わんとすることを読み取ると、一言に纏めてみせた。

「そういうことだ」

俺の見立ては合っていた様で、酒を口にしたレイリーが満足そうに頷いた。

「まあ、覚えておくさ」

どのみち力が足りない。

今のままでと聖地に襲撃をかけたところで、失敗は目に見えている。

俺だつてまだまだ強くなる余地は残ってる。

当面は東の海で金を稼ぎつつ、海楼石の調達。

それが済んだら、島の連中に運送業等の経営権を売却してから取引先を引き継いで、インフラ設備を売却する。

そして、アーロン一味は巨万の財を築いた勝利者として魚人島へ凱旋だ。

でも、アイツ等はインフラ設備の売却とか、経営権の売却とか理解してくれねーんだろな。

造つたのは自分たち？

いやいや、金を出したのは俺達だろ？

人間同士なら通じるハズの理屈が、何故か俺達を相手にする場合に限って通じない。

いや、理由は判ってるんだけどな………はあ、めんどくせ。

いつそ、蓄財しているハズの金を根こそぎ奪つて去りたくなるが、ここは我慢だ。

無意味な略奪、無駄な虐殺をしてしまえば、俺達は天竜人と同じになる。

と、まあ、ざつと考えただけでもやるべき事は多い。

出来れば共に聖地へ襲撃を仕掛けてくれる強者をどこかで見つけておきたいが、これ

是最弱の海と呼ばれる東の海<sup>イーストブルー</sup>でやるよりも、魚人島に戻ってから探す方が効率的か？

何処かに命知らずの強者が居れば良いんだが。

「ま、そういう訳だからさつきの話は考えていてくれ。別に今すぐに……つて訳でもないからな」

一通り考えが纏まった俺は、ハンコックの方へと向き直ると話を締めくくった。

「……………お主、わらわがこの話を告げ口するとは思わぬのか？」

「そりや大丈夫だろう？ あんなクズに味方する奴なんて海軍以外にいてたまるか……つて言いたいところだが、居るんだよな。でも、まあ、ハンコックは大丈夫さ」

「何故、そう言い切る？ わらわは七武海。言うなれば政府の犬」

「ハンカチをくれたからだ」

実際の所は貸したつもりなのかも知れないが、ここは断固として貰ったということにしておこう。

「ハンカチじゃと？」

「ここである時、ハンコックは縁もゆかりもない俺にハンカチをくれただろ？ それつてかなり優しい心があるからなんだよな。んで、優しい奴なら天竜人なんかに味方をするはずがない。だからハンコックになら話しても大丈夫、つて訳だ」

「たった……たったそれだけの理由で、わらわに話したというのか？」

「十分だろ？ まあ、これは俺と、俺達魚人の問題だからな。ハンコックが危ない橋を渡ることもないし、嫌だと思ふなら断つてくれて構わないさ」

「関係あるのじゃ……」

「は……？」

そう言ったハンコックはドレスをはだけさせると、胸を露にしてから背中を向けた。

いや、眼福だけど背中を向けてから脱いでも良くないか？

こっちはストレスとか鬱憤とか、その他色々溜まつてるんだから、毒じゃないけど目に毒だ。

なんてくだらない事を考えていると、ハンコックが長い髪をたくしあげた。

その背に現れる天竜人の紋章。

それが何を意味するのか、俺は知っている。

そして語られた三姉妹の身に起きた悲劇。

聞いてるだけでムカつきが止まらない。

出来る事なら今すぐにでも皆殺しにしてやりたいが、今の俺では力が足りない。

なんでだ？

まじで海軍の連中はなんでこんな天竜人を見逃すばかりか、護るんだ？

訝しげな視線をレイリーに送つても、伏し目がちに酒を口にするばかりで話す気配は



全くない。

ちつ……そうかよ。

自分で何とかしろってんだな。

やってやるさ。

さしあたってはこの過去に囚われた三姉妹をどうするかだが……実際のところ、彼女の苦しみは俺には判らない。

ただ、ハンコックから感じるあの感覚の意味するところが理解出来た事で、無性に腹が立った。

「ふーん……ま、良かったんじゃね？」

「なんじゃとっ!？」

「ハンコック達は今もこうして生きていゝ。しかも、誰もが羨む美貌と、誰もが恐れる称号までも備えて、ダ。それでウジウジウジ悩むなんてバカじゃねーか？」

これは半分本音で半分が嘘だ。

俺の母さんは殺された。

それに比べたら生きてゐるハンコック達はそれだけでも恵まれてゐる。

恵まれているハズなのに、天竜人のせいで過去を引き摺り苦しみ続けるなんて、おかしいだろ。

「っ!?! ……………そなたに話したわらわが馬鹿じゃった。表に出るが良いっ! その減らず口、二度と叩けぬようにしてくれるわっ!」

「おーおー、上等ダ。七武海の力、確かめてやんヨ」

ハンコックが怒るのは当然だろう。

と言うか、怒る様に仕向けたからな。

同じ体験をしていない俺は、ハンコック達の苦しみをホントの所で理解することは出来ない。

今の俺がハンコックにしてやれるのは、怒りの捌け口になってやること位だろう。

怒りに任せて想いのままに暴れる。

これが鬱憤解消に効果アリなのは、アーロン相手に実証済みだ。

鬼の様な形相を浮かべたハンコックの誘いに乗った俺だが、ここで問題に気付いた。

なんだその鬨気?!

ハンコックって覇気使いか!?

下手すりゃ、死ぬな、コレ…………。

しかし、今さら後にも引けずにぼったくりバーから出た俺は、小一時間ばかりハンコックと殴り合うのだった。



「痛ててて……ちつたあ加減しろよな」

「黙らぬかつ。そなたこそわらわの顔を殴りよつて」

殴り合いを終えバーに戻った俺達は、カウンター席で隣同士に座り、尚も口喧嘩を続けていた。

と言つても、そこに険悪な雰囲気はない。

そもそもハンコックの方も、俺の安い挑発に敢えて乗っていた節がある。

殴り合いを終えた今は、どこかスツキリした感じだ。

「ハッハッハッ。若いというのは良いものだな」

今日の飲み代は基本的に俺持ちだ。

タダ酒より旨い酒はないとばかりに、レイリーは飲みまくっている。

「黙れ、酔っぱらい。てか、早く止めるよ。死ぬとこだったじゃねーか」

どちらが強かったかは語るまい。

ただ軽く三途の川が見えたとだけ言っておく。

「そなたが貧弱なのが悪いのであろう？ あんな程度でアレに齒向かう等と正気の沙汰とは思えぬわ」

「うるせー。顔を腫らして言ってるな。大体、そんな事は自分が一番判ってる。だから、今すぐって話じゃないって言っただろ」

「やはり、本気なのじゃな」

「当然だ。アレを何とかしない限り、魚人島にはホントの意味で平和はこないしな」

今でこそ少し落ち着いて見えるが、狂ったアレのほんの思い付きの言葉で、魚人の生活は変わってしまう。

例えば、そう……人魚の奴隷が欲しいなんて言われた日には、人買い家業の連中だけでなく、海賊達も魚人島に大挙して押し寄せてくるだろう。

「そうじゃな。そなたが……そなたが、わらわより強くなれば協力してやっても良いぞ」  
「いや、別にハンコックが無理しなくて良いし。聖地とか行きたくねーだろ？ たった一度の人生だ。嫌で辛いことなんか忘れて、楽しく生きるってのもアリだろ」

さつきは気軽に頼んでしまったが、ハンコックにトラウマがあるなら話は違ってくる。

別に無理をしたハンコックに頼まなくても、金に目が眩む不正海兵はきつといえるし、賄賂に使える金はたんまりとある。

こんなことに関わらなくて済むならそれが一番。

俺だって可能ならこんな事はしたくない。

ただ、俺の場合は二度程被害を受けただけでなく、人生が二度目だからやりやすいだけだ。

「簡単に言うてくれよ。それが出来るなら苦労などせぬ」

「あー……、まあ、やつぱりそうだよな」

心の傷は、つくづく面倒くさい。

掛ける言葉に詰まった俺は、誤魔化すように酒を口へと運んだ。

「はいはい。せつかく再会出来たんだから、物騒な話はこれくらいにして楽しく飲まなきゃ。こんな話より、私はシュヴァちゃんと言った事が気になるわ」

ここで唐突にシャツキーが話題転換を計る。

おそらく重い空気を察したシャツキーなりの気遣いだろうが、なんだろうか。

「俺が言った？」

結構色々喋ったし、何がシャツキーの琴線に触れたのか判らない。

「そうよ。気になる女にも手を出せず……それって一体どういうことかしら？」

「ほう。シュヴァ君も色を知る歳になつたか」

「うげっ!？」

俺、そんな事言ったか？

言ったんだろな……ここぞとばかりに酔っぱらいが食いついてくる。  
めんどくせ。

でも、まあ、いいか。

酒の肴位にはなるだろう。

「いや、別に大した事じゃないんだ……」

そう前置きした俺は、ノジコとの出来事を語り聞かせた。

イーストブルー

東の海で出会った一人の少女。

おれたち侵略者に対してもナチュラルな目で見てくれた少女。

悪法であっても法は法とばかりに、単に逆らうだけでなく時には俺達へ改善点を訴えてくる、気が強く一本芯が通った女。

そんな女とある日、

あやしい雰囲気なったこと

据え膳喰わねばとばかりに喰おうとしたこと

その途中、脱げば魚人とバレると気付いたこと

嫌われるのを恐れ、悪態ついて逃げたこと

それからは、気まぐずで話していないこと

酒の勢いもあつたのだろう。

俺はほぼ、包み隠さず話していた。

そして、

「あ、姉様。この男、ヘタレよ」

「侵略者とか関係なく、ヘタレよ」

「その様じゃな」

話を聞き終えた三姉妹の言葉にキレた。

「ああんっ？ 上等だ！ 表に出ろ！ その偉そうな口を二度と叩けなくしてやる！」  
こうして飲んで暴れての愉快な夜は過ぎていった。



そして一夜明け、魚人島に向かった俺はそこで衝撃的な言葉を聞かされる。

『予言の日は直ぐソコよ。』

あなたはこんな所で何をしているのかしら？』

………は？

ありえんっ。

なんでだ？

もう少し、もう少しで全部上手いくつてのに！

シャーリーから予言が変わっていないと聞かされた俺は、ぼったくりバーにリュックを預けると海へ飛び込み、全速力で東の海をイースター目指すのだった。



## 9話 シュヴァとノジコ

「嘘だろ……?」

魚人島から戻った俺は、誰の気配もしないココヤシ村の大通りで立ち尽くしていた。漫画通りの出来事が起こった……誰も居ない状況がそう考えるしかないと如実に表していた。

なんでだ、アローン?

どうしてナミの金を奪わせた?

行き掛けの駄賃のつもりか?

ナミから金を巻き上げようが巻き上げまいが、間もなく魚人島へと凱旋する俺達にとつちやあ大した違いはないはずだ。

ナミもナミだ。

ルフィに助けを求めなくても、あと少し。

あと少しでココヤシ村だけでなく、この島丸ごと解放されたんだ。

悪い様にはしない……そう伝えていたはずだが、信用されなかつたってことか。

儘ならないもんだ。

だが、ここで嘆いていても何も変わらない。

「こうしちゃいらねえっ……」

そう呟いた俺は、アールンパーク目指して駆け出した。



「あれは、ココヤシ村の連中か？」

アールンパークと門の周りに群がる人の群れが見える。

今がどのタイミングか判らないが、建物が健在って事はまだ間に合う。

気合いを入れて大地を蹴った俺は、人の群れを飛び越えアールンパーク内へと足を踏み入れた。

「無事かっ!? アールンっ!!」

着地と同時に辺りを見渡す。

武器とも言えない得物を持ったココヤシ村の連中が勢揃い——いや、ノジコと駐在が見当たらないが——揃いも揃って絶望的な顔をしているな。

そんなビビるなら大人しくしてりやあ良いものを……と言いたい所だが、それだけ俺達の支配が我慢ならないということだろう。

こゝろは成らないようにしてきたつもりだが、俺が考えていた以上に種族の壁があった。

「あれは、ヒレ?」

「魚人だったの!?!」

「でさえっ?!? アイツもサメなのか?」

「1200万の賞金首、シュヴァアッす」

「アイツは千人殺しの異名を持つ、アーロン一味の中でも厄介な男っすよ」

リュックを背負わない俺の姿を見たココヤシ村の連中と長い鼻の男が好き勝手に喚き、恐れや怯えと言った負の感情を向けてくる。

ムカつくが、想定内の反応だな。

コイツらにかまけている暇はないし、とりあえず放置だ。

「戻ったか、シュヴァア。ちようど今、どこぞの海賊達を始末しようとしていた所だ」

俺に気付いたアーロンが、さも何事もなかったかのように話しているが、内心はらわたが煮え繰り返っているのだろう。

パッと見た感じ倒れていない魚人はアーロンだけで、アーロンパークは此処そこ彼処かしこが破損している。

ビリビリとした怒気を放つのも当然だ。

そのアーロンと対峙する三人。

刀を構えた緑髪がゾロで、片膝突いた金髪スーツがサンジか？

そして、ナミ。

なぜかアーロンの直ぐ近くにナミがいる。

「嘘っ……シュヴァア？ もう、最悪っ……」

「ふざけるっ、最悪なのはこつちだ。こんなことになるなんて……やっぱりお前は殺しておくべきだったか」

今さら言った所で詮無きことか。

ホントにこの事態を回避するなら、有無を言わずナミを殺せば良かっただけだ。

それをせず、それが出来ずに中途半端な対応してきた俺にこそ、この事態を招いた遠因があるのだろう。

そうだと判っていても、怨嗟の言葉が口をつく。

「???  
っ!？」

下唇を噛んだナミが驚きに目を見開く。

だが、なんだ？

ナミから感じるのは恐れよりも哀しみに近い気配。

いや、今はナミに構ってる場合でもない。

最悪を想定した最後の手段。

俺が今日まで鍛えてきたのは、物理的にルフィ達を黙らせる事が可能なように、との意味もある。

ルフィはどこだ？

俺がルフィを抑えれば破滅の予言は変えられる。

辺りの様子を探っていると、水門の方から噴水の様に水飛沫が高く上がった。

「ちっ……面倒くさい事になってやがる」

「30秒。それ以上はもたねえ」

小声で呟き刀を咥えたゾロが、俺とアローンに刀を向けるとサンジが海へと飛び込んだ。

「させるかよっ!」

「ま、待って!」

ゾロには構わずサンジを追って海に飛び込んだ俺の背後からナミの声がするが、誰か待ってなんかやるもんか。

おそらく、気味が悪いくらい漫画通りに、重石を付けたルフィが海中に居るのだろう。さっきの飛沫がその証拠だ。

海中のルフィを確保さえすれば、この場はなんとも乗り切れる。

破滅の未来になんてさせてたまるか。

俺はそんな結末を迎える為に今日までやってきたんじゃない。

アーロンは、アーロン一味は、勝利者として魚人島に凱旋するんだ。

◇

あれは……ノジコか。

海底から海面に向けて伸びる線。

その元で横たわる胴体と、その直ぐ側にノジコが居る。

海中でサンジを追い抜いた俺は、その元に向かって一直線に泳いだ。

「っ!？」

俺に気付いたノジコが泡の様に空気を出すと、両手を拵げて行き先を塞ぐ。

やはりというべきか。

俺の前に立ちはだかったノジコをやり過ぎそうと回り込むも、腰の辺りに抱きつかれた。

おいおい、マジか？

なんでそんなに早く動ける？

てか、不用意に近寄り過ぎだ。

この状況下で俺が攻撃しないとでも考えているのか？

『邪魔だ』

別の機会なら嬉しい体勢だが、今はそんな事を考えている場合じゃない。

押し退けようと肩を押すも、首を横に振ったノジコがしがみついたまま離れない。

——ドカッ

そうこうしている内にサンジがルフィを沈める重石を蹴り碎いた。

足枷が無くなったルフィの身体が勢い良く海面へと登っていく。

なんだってんだよっ。

何故こうも後手に回る!?

これが定められた運命とでもいうのか？

呆然としかける俺だが、まだだ。

まだ、終わってない。

腰を掴んでいた手を力なく離れたノジコを抱き抱えた俺は、ルフィを追って海面へと

急いだ。

◇

「ゴムゴムのガトリング！」

俺が海上に飛び出ると、ルフィの攻撃で吹き飛ばされたアーロンが建物の瓦礫に埋もれる光景が飛び込んだ。できた。

「デメエツ……麦わらっ！」

「なんだあ、お前？」

「問答つ無用っ！」

ノジコを抱えたままの俺は、一足跳びに距離を詰めるとルフィの顔面目掛けてハイキックを放つ。

ノジコ女を抱えたままの俺が即座に攻撃を仕掛けると思っていなかったのか、マトモに食らったルフィが外壁に向かって吹っ飛んだ。

「痛ってー。なんだあ？ アイツの攻撃？」

外壁にぶつかり瓦礫に埋もれたハズのルフィは、何事もなかったかの様に瓦礫をはね除け起き上がる。

ゴムゴムの実。

思ったよりも厄介な能力だな。

攻撃を当てた箇所にはダメージが通らず、今みたいに吹き飛ばしてしまえば、吹き



飛んだ先でいくら衝撃があつた所で意味は無さそうだ。

だが、いくらでもやりようはある。

掴んでから殴つても良いし、うち下ろす攻撃を多用するのもアリだろう。

首尾よくマウントを取つて押さえ付ける事が出来れば、俺の勝ちは揺るがない。

だから、

「覇気よ。シュヴァは覇気と呼ばれる力を使う覇気使いよ。それを纏つた攻撃は悪魔の力の実体を捉えるのよ」

俺とルフィとの間に割つて入つたベルメールが、種明かしとばかりに助言した所で構わない。

「退けよ、ベルメール。余計な真似はするなど伝えていた筈だぞ」

「いくら怖くたつて、そういう訳にはいかないのよねえ。娘ナミを殺しておけば良かった

……なあんで言われたら、こうするしかないじゃない？」

アンタに出来るとは思えない、そう付け加えたベルメールが煙草に火を点けてニカツと笑う。

さすがに堂々としている。

むしろ今日まで大人しくしていたのが不思議な位の女だからな。

それにしても……何か嫌な感じがする。

なんだ？ このベルメールの自信は？

怖いと言いつつ、俺を全く恐れていない？

「……なら取り消した。ナミもお前も、村の連中も殺さねえ。そこの麦わらを物理的に黙らせてやれば、この騒ぎは仕舞いだ。だから、さつさとソコを退けつ、ベルメール！」  
「そりゃあ聞いてやれねえ話だ」

ベルメールとの対決を避けた俺の背後に、瓦礫の中から這い出たアーロンが立っていた。

聞いてやれないって、何に對してだ？

面倒だが先にアーロンを説得か。

そんな風に考えていたらヒレを掴まれた。

「アーロンっ……!?!」

後ろに引つ張られたかと思ったら、そのまま後方へと投げ飛ばされる。

意識を失ったままのノジコを護る様に抱えた俺は、受け身も取らずにココヤシ村の連中とは反対側の外壁に勢い良くぶつかつた。

腕の中のノジコが「きゃっ」と小さく悲鳴を上げる。

「テメエツ、アーロン！ 何しやがる！」

痛くないけど、意味がわからん。

「テメエはすつこんでな、シユヴァ。ゴム小僧はおれが……殺すつ」

「つ!? い、いや、駄目だ。あんたは一味の頭かしらなんだ。そのあんたがやられちまったら俺達の負けじゃねーか。麦わらは俺がやるつ!」

「そうだ。おれが頭かしらよ。そのおれが殺ると言ってるんだから黙って見てろ。それとも何か? テメエはこのおれが下等な人間に負けるとでも思ってるのか?! エエツ!」

「それはっ……」

負ける。

そうだ……このまま闘えばアーロンは負ける。

あの強かったアーロンの実力的に考えたら有り得ないハズが、予言的に考えて、漫画的に考えたらアーロンは負ける。

だから俺は、アーロンを止めるべき。

でも、どうやって?

一度進言して却下された俺が、ここまでハッキリ自分でやると言っているアーロンをどうやって諫める?

お前はその人間に勝てない。

だから俺が代わりにやってやる?

トラウマ  
心の傷を抱えるアーロンに此れを言えっか?

そんな事、口が裂けても言えないし、言った所でアーロンが聞き入れる筈もない。

アーロン一味はアーロンを慕う魚人達の集団で、基本的に決定権はアーロンにしかない。

それは今も昔も変わらない。

意見を言う分には、言いたい奴の自由だろう。

しかし、それを採用するかどうかはアーロン次第。

アーロンの方針が嫌なら一味を抜けるのが筋になってくる。

だったら俺が取るべき道は一つ。

「……思っていないっ！ だから、勝ってくれっ！ アーロン!! そして、歯向かうクズどもを返り討ちにしてやろう……俺達、二人でっ!!」

「シャーハツハツハツ! 判ってるじゃねーか、シュヴァア! 逆らう奴、舐めた真似をしてくれた奴は殺すっ! 先ずはテメエからだ、ゴム小僧っ!」

高らかに笑い声を上げたアーロンと、何を考えているのかイマイチ掴めないルフィの闘いが始まる。

腰を落として胡座をかいた俺は、ノジコを隣に座らせるとアーロンの勝利を願って闘いを見守るのだった。



——おれとお前の絶望的な違いはなんだ？

先ずは舌戦とばかりに、アーロンとルフイの問答が繰り広げられている。

「アンタは加勢しないの？」

それを見詰める隣に座るノジコが、正面を向いたまま俺に話しかけてくる。

「そういや、こうやってノジコと話すのは久しぶりだな。」

「アーロンが殺るってんだから俺の出る幕は無いんだよ」

俺の出る幕があるとすれば、それは決着が付いた後になる。

どっちに転んでも面倒な事になりそうだ。

「随分と自信があるんだね。それは上等種としての余裕ってやつかい？ 足元掬われ

たって知らないよ」

「は？ そんなもん有るわけねーだろ。てか、お前、アーロンが本気で『魚人は上等種』

とか言ってると思ってるのか？」

「ナミから聞かされてるし、私も何度かアーロンの講釈は聞いたからね」

「そんなもんは自分達を奮い立たせる為の只の只のスローガンだぞ？ 魚人は上等種……そ

れを本気で信じてるのは魚人島に居る馬鹿共くらいのもんさ」

——トウースガムっ！

自らの歯を両手に持ったアールンが攻勢に出た。

「それってどういこと!？」

アールンの攻勢はルフィのピンチ。

それなのに驚いたノジコが俺の方を向く。

ちやんと闘いを見ているよ、と思いつつも向けられたノジコの顔に、俺はどぎまぎしている。

顔の造形だけで判断するならハンコックの方が上だろうに、どうしてコイツはこうも俺を惑わせる？

って、そんな事はとつくの昔に判ってる。

俺はナチュラルに物事を見てくれるノジコが、初めてあつた頃から好きだったんだ。

それに気付きながら出した答えに背を向け続ける俺は、どこまでも中途半端なヤツなんだろう。

今だってそうだ。

アールンは負けると判っていないながら何も手を打たず、闘いの後を考えてしまう。

冷酷に成りきれず考え付く限りの最善手を打たない俺は、次善の策とか嘯いて態度を変えろ。

多分これが後手に回る原因なんだ。  
と、判ったところで変えられない。

「……………俺達にも色々あるんだよ。アーロンは一度、人間に負けて投獄もされてる。それで人間が下等なんて本気で言ったら単なる馬鹿じゃねーか？ 平均値なら魚人の方が強いのは間違いじゃないけど、人間は数が多すぎる。一千万人に一人位の才能の持ち主になってくれば、俺やアーロンより強いんだよ」

こんなことをノジコに語った所で意味はない。

でも、今日で最後かと思うと、無性にノジコと話したかった。

「そう、なんだ……………って、やっぱりアンタも魚人だったんだね」

「……………魚人で何が悪い？」

「悪いなんて言つてないさ。ただ、どうして隠してたのかと思つてね」

「別に隠して……………いや、お前に嫌われたくなかつたんだ」

「み、見くびられたもんだね。私はあんたが魚人と知ったら掌を返す様な奴……………そう思われてたんだ？」

「そうじゃない……………けど、まあ……………そうなるのか。悪かつたな……………」

「そう素直に謝られてもね？ だけど、私とアンタじゃどの道上手くいきっこないし、これで良かったんだよ……………。アンタは支配する側で、私は支配される側。ねえ？ どうし

てこつち側に来てくれなかったのさ？　こうなる前につ、アンタがこつちに来てさえくれればっ！」

——シャーク・オン・ダーツっ！

海に潜ったアローン。

水面に突き出たアローンのヒレに皆が注視する中で、ノジコだけが俺を見ていた。

ノジコの言い分は理解出来る。

だが、さすがにそれは受け入れられない。

「俺がそつちに行つてどうする？　俺は支配する為に、アローン帝国を作るためにやつて来てたんだぞ？　大体な、それを言うならノジコが支配する側にくれば良かったんだよ。そうすりゃ、もつと上手くいったんだ」

「そんな事出来る訳ないじゃ、ない……つて、アンタ今、過去系で話してない？」

「そりゃそうだろ。この鬨みにアローンが勝とうが負けようが、元々近々この島から撤収する予定だったんだからな」

「嘘っ!?! どうしてっ?」

——ゴムゴムの綱い!!

海中から高速で飛び出たアローンを、指を網状に伸ばしたルファイが捉えた。

器用な真似をする。



というか、これはほぼ漫画通りの闘いか？

結構色々してきたハズなのに、変わって欲しいことは変わらないのか。

因みに、ノジコはもう闘いを見ていない。

撤回の一言が予想外だったのか、立ち上がったノジコは闘いに背を向け、俺と向かい合っている。

「さつきも言ったし、昔にも言っただろ？俺達は虐殺する為に来たんじゃない。支配する為に来たんだ。それが不可能だと気付かされれば、これ以上この島に留まる理由はない。無駄な事に時間を費やす程、俺は暇じゃないんだよ」

「ふざけてるの？ 散々好き勝手してつ、それで今になって無駄な事に費やす時間？ アンタはこの島の人達をなんだと思ってるのよっ！」

「そりゃこつちが聞きたい。お前らは俺達をなんだと思ってるんだ？ 前々から知りたかったんだ……お前は、島の連中は、何がそんなに嫌なんだ？」

「それ……本気で言ってるの？」

「当たり前だ。そりゃあ、金は取ったさ。逆らう奴は殺しもする。けど、そんなもん支配者なら誰だってやることだろ？ 取った金を島に戻し、金がない奴の為に簡単な仕事を作って、交易で島全体の収益を増やす。外敵は排除して安全も確保してるんだ。ここまですべて何がそんなに嫌なのか、理解に苦しむが……まあ、魚人だから、だろ？」

——ゴムゴムの槍！

両足を伸ばしたルフィが、アーロンの腹部を貫かんばかりの勢いで打ち付けた。  
「それはっ……」

形勢はルフィが有利なのに、俺の話聞いていたノジコの顔が曇つてく。  
やっぱりノジコは良い女だ。

憎むべき俺達が相手であっても、事情を聞いてしまえば同情が出来てしまう。

「そんな顔すんなよ。別にノジコを責めてる訳じゃなければ、お前は違うって信じてる。  
これは単なる確認だ、確認。支配が無理だつてのは結構前から判つてたしな。これで心  
置き無く撤収できるつてもんだ」

「支配が無理つて、じゃあ今アンタ達がやってるのはなんなのよ!？」

「今は単なる金儲けだな。」

ノジコはさ、若夫婦が子供の事で相談に来た日の事を覚えてるのか？」

「ええ、覚えてるわよつ。私はアレでアンタが魚人だつて気付いたんだから」

「ん？ そうなのか。まあ、それは良い。」

あん時に若旦那は言ったよな……「子供を作る気はなかった」つて。それは、あの夫婦だけの事じゃない。この島にいる若い夫婦は834組、夫婦でなくてもベルメールやノジコみたいな独り身の女も300人程居る。お前は8年の間にこの島で何人の子供

が産まれたか知ってるか？」

「えっ……？ それは知らない……けどっ」

「ゼロだ。」

笑えるだろ？ 子育て適齢期の人間が2000近く居て、誰一人として子供を作らない……大人達は生きる為に妥協して渋々従う道を選ぶとしても、魚人のアーロン一味が支配する世界には新たな生命は誕生させたくないって事だ」

新たな命が誕生しない。

このままいけばそう遠くない将来、支配するべき住民がいなくなる。

そうなれば支配も何もあつたもんじやない。

「それはっ、違うよ」

「違わねえよ。これが人間は魚人の下では暮らしたくない、何よりの証。………さあ、無駄話も終わりだ。そろそろ決着が付く」

キリバチを手にしたアーロンが、それを振り回しながら跳び跳ね避けるルフィを追っていく。

それにしても、ルフィは思ってたより強い。

もつと苦戦したイメージで覚えていたが、闘いを通してルフィには余裕があつた。

こりや、イーストブルー最弱の海の環境に慣れきつて鈍りきつたアーロンが、ちよつとばかり鍛えた

所じゃ勝負の結果が変わらないのも当然か。

「この鬪いに決着が付いたら……アンタはどうするのさ?」

「決まってるだろ? 俺はシュヴァア。アーロン一味の幹部、シュヴェーアトヴァールだ。

アーロンの決定に従い、一味の運命さだめに従うだけだ」

「馬鹿だね、アンタ」

「そうだな」

「でも、話して判ったよ。アンタはやっぱいいヤツだよ。そんなアンタを立場なんてものがそうさせてる。

だから……」

そこで言葉を区切って俺に背を向けたノジコは、大きく息を吸い込むと物が吹き飛ぶ。アーロンパーク最上階に向かい、見当違いな事を叫んだ。

「お願いっ! アーロンに勝って!!」

勝って私達をつ、この島をつ、ナミをつ!

シュヴァアを解放してあげて!!」

——ゴムゴムの斧っ!!

ノジコの叫びに応える様に、アーロンパークから伸びた足が勢い良く振り下ろされた。

そして、崩れるアーロンパーク。  
「やっぱ、これが運命さだめか……」

# 最終話 ノジコ love&peace

「やっぱ、これが運命か」

そう呟いたシュヴァは項垂れた。

シュヴァの大きな身体が小さく見える。

「ナミいいいっ！ お前は俺の仲間だああ！」

「うんっ……いっ！」

崩れ落ちたアールンパークのてっぺんでゴムの海賊が叫ぶと、ナミが頷いた。そこに村の皆が駆け寄り歓喜の輪が出来上がる。

私もあの輪の中に入っていきたいけれど、頭を垂れたまま動かないシュヴァも放つておけない。

「シュヴァ……」

アールンが倒れ嬉しくないと言えば嘘になる。

だけど、こんなシュヴァも見られない。

シュヴァなら自分たちの行いが島の人達を苦しめているって判っていたはずなのに、一体どうしてそこまでアールン一味の為に働くの？

シュヴァは子供の頃からずっとアーロン一味の為に働いてきた一方で、私達やナミの為に尽力してくれていた。

ナミから何度か聞かされたアーロン暗殺阻止なんてその典型的なものよ。  
アーロンの暗殺が成功するならまだ良い。

でも、下手に手傷を負わせて失敗していたら、ナミは確実に殺される。

そうさせない為に庇ってくれている。

私はそう考えていたけど、違うのかい？

「そこまでだ、貴様らあ！」

シュヴァへの二の句が告げられずにいた私の耳に聞こえてくる嫌な声。

ぞろぞろと海兵を引き連れてやって来た、ナミのお金を奪い、私を撃ったフードを被った海軍准将。

「ちちちちつ。今日はなんとというラツキーデイ。いやあご苦労。闘いの一部始終を見せて貰った。まぐれとはいえ貴様らの様な名もない海賊ごときに魚人どもがよもや負けよう等とは思わなかった。全員武器を捨てろ。貴様らの手柄、この海軍第16支部准将、ネズミが貰ったあ」

——ダダダダダダンッ！

あまりにもな海軍准将の言い分に腹を立てたのか、腹巻きの剣士が背後から近よる

も、その足元に撃ち込まれる無数の銃弾。

「ちちちちつ……ここは完全に包囲している。次は威嚇では済まさんぞ」  
いつの間にも!?

周囲を見てみると、アールンパークの三方を囲む外壁の上に銃を乗せ、多くの海兵達が狙いを付けている。

そして、その銃口の先は倒れた魚人達だけでなく、村の皆にも向けられている。

なんなのコイツら?

コレが海軍のやることなの!?

「ガイハシヨーっ!!」

えっ?

今の……何?

立ち上がったシユヴァの伸ばした手から、幾本もの光の帯が放たれた。

東の外壁の上で村の皆に狙いを付けていた海兵達が、光の帯によつて纏めて吹き飛んだ。

それを見ていた海賊が「びーむだっ、スツゲエ!」って目を輝かせてるけど、がいはとかびーむって何なのよっ!?

「退いてるよ、ロロノア・ゾロ。ソイツは俺達に用が有つて来てるんだ。そうだろ? 准



将殿」

焼け石に水だな、そう呟いたシユヴァは腹巻きの剣士を押し退け海軍准将の元に歩いて行く。

すかさず海軍准将の側にいた海兵達が、シユヴァに銃を向けると狙いを定めた。

「ちちちちつ。海軍としての職責を全うするために来てやったのだよ」

「ご苦労なこつた。でもな？ たかが500やそこらで俺とやり合えると思ってるのか？」

「ちちちちつ……千人殺しのシユヴァ。大層な通り名だが、これでどうかな？ おい！ 連れてこい」

准将が合図をすると、外壁に空いた穴の向こうに鎖で縛られ、顔を腫れ上がらせた魚人が姿を表した。

酷いことするもんだね。

捕まえるだけならあそこまで痛めつけなくたって良いじゃないか。

「チユウ……」

「無策で来るわけがなからう？ 暴れるしか脳がない貴様らとは違うのだよ」

「なるほど。どうやらお前を出世させ過ぎたみたいだな。んじや、まあ、取り引きといつか」

「ちちちちつ。何のことかね？ それに、取り引き？ この状況で何を言っている？

貴様ら薄汚い魚人共は全員捕縛！ アーロンパークに蓄えられた金品は全て私の物だ！！」

「ハア？ 状況が判ってねーのは、テメエだネズミ。そいつらに手を出してみろ。一人残らず殺してやるぜ。お前らに俺を殺すことは出来ないが、俺はお前らを皆殺しに出来るんだぜ？ 譲歩してやってるのはこっちなんだよ！」

「じゅ、准将……ここは聞いても良いのでは？」

「よ、良かろう。言ってみろ」

身体から黒い煙の様なモノを立ち上らせたシユヴァの迫力に押された海兵が進言すると、准将は冷や汗を垂らしながら交渉に応じた。

そうしてシユヴァが語った取り引き案。

それは賞金首である自分とアーロンの身柄と引き換えに、他の魚人達は見逃せといったモノだった。

「馬鹿じゃないのっ?! なんでアンタがそこまでしてやらなきゃいけないのさっ!」

シユヴァの側に駆け寄った私は、丸太の様な腕にしがみつくと身体を揺らせて訴える。

シユヴァ一人なら絶対逃げられる。

いえ、逃げなくたってホントに皆殺しに出来るだけの力をコイツは持っている。

「賞金首だし、捕まるだけの事はしてきたからな」

「そうじゃなくって、どうして逃げないの!?! どうして闘わないのよっ!」

「はあ? 闘える訳ねーだろ? 後手に回り過ぎたんだよ。そりゃあ三分もあれば海兵共を皆殺しにする自信はある。でもな? この状況で俺が闘うと、魚人の誰かが殺されることになる。俺達が捕まる事で誰も死ななくて済むなら、アーロンだってこうするさ」

「ちちちちつ。なるほど、なるほど。そういうことなら、悪くない。先にアーロンの身柄を拘束! 貴様らが不当に蓄えた金品は没収!! それで構わぬなら受けてやろう」

「さすがに順序は間違えねーか。ま、交渉成立。念のために言っとくが、絶対に殺すなよ? アーロンを殺せばこの場にいる全ての人間が死ぬと思え」

お手上げのポーズを取ってそう言ったシユヴァは、手は出さないとばかりに腕を組んだ。

「ちちちちつ。アーロンを捕らえよ!」

海軍准将が指示を出すと、意識を失ったアーロンの元へ鎖を持った海兵達が群がっていく。

私には理解できない。

「なんで……」

「ん？」

「なんでアンタが捕まらなきゃいけないのよつ。アーロンだけ差し出せば良いじゃないか！」

「いや、別にそこまで変な話じゃないだろ？ お前らだつてナミの為に命をかけて反乱を起こしたんだ。誰かの為に命を張るなんてそう珍しくもない。俺に言わせりゃ、ナミに命の危険は無かつたつてのに、命を賭けるお前らの方が理解に苦しむ」

「そつ、それは私達がナミを大切に想っているからだよ。でも、どうして!? どうしてアンタがアーロンなんかの為にそこまでしなきゃいけないか聞いているの。もうアーロンは倒されたのよ!? 従う必要なんてないじゃないか！」

「お前……やつぱり思い違いしてるぞ。ノジコ達から見れば憎い侵略者のアーロンでもな？ 俺やクロオビ、他の魚人達から見れば、頼り甲斐のある良いヤツなんだよ。じゃないと、これだけの数の魚人達が故郷を離れて付いてくる訳ねーだろ？」

「嘘つ……？ アンタ、それ本気で言ってるの？」

アーロンが良いヤツ？

そんなこと考えもしなかった。

「本気も本気。もう時間もねーし、判りやすく言つてやるよ。俺はな、こーんなガキの頃

からアーロンの世話になってるんだぞ？ 俺にとってアーロンは親も同然なんだ。ちよつと失敗したくらいで親を裏切る奴が何処にいる？」

「親？ アーロンが……？ だったらつ、親だつて言うんならつ、侵略的支配させなきや良かったんだよ！」

多分シユヴァが言っているのは義理の親。

私やナミにとつてのベルメールさん。

意味は判るけど、理解が追い付かない私は変な事を叫んでる。

親でも子供の行動を正せないのに、子供が親の行動を正すなんてもつと難しい。

「そうだな……でも、俺には止められねえ。アーロンにはアーロンなりにこうするだけの理由が有ったんだ。それがよく解る俺にはアーロンを止められなかった。俺に出来た事はなんとか上手にやりくりする事だけだ……こんな結果になったけどさ、これでも随分マシになってるんだぜ？」

誰にも理解されねえけどな、と小さく哀しそうに呟いたシユヴァは、ホンの少しだけ笑った。

初めてかもしれないシユヴァの笑顔に、私は何も言えなくなった。

黙る私達の視線の先で、鎖で縛られたアーロンが台車に乗せられ更に鎖で縛られた。

アーロンが親だつて言うのなら、シユヴァは今どんな気持ちでこれを見ているんだろ

う。

「すまぬ、シユヴァ。おれ達が不甲斐ないばかりに」

クロオビと呼ばれている魚人がお腹を押さえ、ふらつきながらシユヴァの元にやって来た。

「別に大したことないさ。生きてる内は何度だってやり直せるし、方針変更は俺の十八番おはこってやつさ。とりあえず最終プランで撤退。俺とアーロンは監獄に行くから、恩赦よろしく！ ってジンベエに言っといてくれ」

「お前は……こうなる事を予期していたのか？ いや、任された。必ず同胞達と魚人島へ還り、ジンベエさんに伝えておく」

「おうっ」

短いやり取りを済ませたクロオビは、シユヴァと拳を合わせると倒れる魚人達の元へ向かった。

揺り動かして魚人達を起こすと、何事かを囁いていく。起こされた魚人達は海へ飛び込むと、そのまま上がってくる事はなかった。

◇

「シユヴァ……」

「ナミ、とベルメールか……」

「ゴメンっ！」

ベルメールさんと並んでやってきたナミは、シュヴァの前に立つと深々と頭を下げた。

「はあ？ 馬鹿か？ なんでお前が謝る？」

「はあっ?!? 人が謝ってあげてんのに。なにによそれっ?!?」

「ナミがルフィに助けを求めたのは、ナミなりの理由があつたからだろ？ だからお前は謝る必要がないし、俺もお前に謝らない。ナミから見たら理不尽だろうが、俺達にも俺達なりの理由がある」

シュヴァの煽りにナミがキレるよくある光景。

でも、何か変。

このやり取りだけじゃない。

今日のシュヴァは、いつもにも増して物分かりが良すぎる。

「理由って何よっ！」

「聞いてどうする？ バカみたいに甘いお前達は、理由を聞けば俺達に同情する事になる。だけど俺達を取る行動が理不尽であることには変わらない。だったら何も知らないで憎む位がちようど良かったんだよ」

「っ?!?」

「そうかもしれないね。アンタ達への反発心があったから、苦しい時でも何がなんでも生き抜いてやる！　って村のみんなは頑張れた」

言葉に詰まったナミの代わりにベルメールさんが答えてる。

「そのまま大人しく生き延びる事だけ考えてりや良かったんだ。なんで今になって俺達に立ち向か……なんだ、お前？」

ベルメールさんと話していたシュヴァアの様子がおかしい。

大きな手で口元を覆ったシュヴァアは、眉間に皺を寄せると絞り出す様にして声を出す。

「命が2つ………身籠ってんのか？」

「うそっ!？」

直ぐ近くにいるナミが驚いてる。

ナミには後でちゃんと言おうと思ってたけど、どうしてシュヴァアに判るんだろう？

ベルメールさんが妊娠しているのは、つい最近判った事で島を離れていたナミにもまだ言えてない。

「へえ〜？　見聞色の覇気はそんなことまで判るんだ？」

「俺の見聞色は紛いもんだ。感じた気配を経験則で割り当ててるだけ……じゃなくって、質問に答えろよ！」



「あつ！ アンタそれで私がアーロンを殺そうとした時に限って邪魔してたのねっ？」  
「あんな殺気がダダ漏れなら、キロ単位で離れてたつて気付くつっの。じゃなくつて、質問の答えはっ？」

「私はね……アンタが助けてくれたあの日から、生きてる気がしなかった。生きてるんだけど、自分じゃない様な不思議な感じ。アンタ達に対しては特にそう。不思議な位に反抗しようつて気が起こらなかつた。多分私はあの日、死んでいたんでしようね？」

「……………それで、何が言いたい？」

「だけど、こうして命を授かつて、やつと生きてるつて実感が湧いたの。そうしたら、やつぱりこんなままじゃいけないと思う様になった。そんな時にアンタ達がナミのお金を盗つたから抗議に来たのよ」

「抗議なら代表者が一人で来い。武器を構えて全員で乗り込んだら反乱としか見なせない。いい年こいた上に身重で何やつてんだ？ ついでに煙草は止めろ。胎児には害しか与えない」

ベルメールさんのお腹を擦りながらの告白を聞いたシユヴァが呆れた様に肩を落とした。

「あはは……煙草は駄目なんだ？ 変な事を知つてるアンタの言うことだし聞いとくよ」

それから、シユヴァとベルメールさんはよく分からないやり取りを続けた。

『自慢の鼻をへし折られないように、せいぜい麦わら帽子に気を付けるんだね』

ベルメールさんがこの言葉を出すと、シユヴァは調べたのか？ と察した様に納得すると、余計な事を喋ると命の保証は出来ないと締めくくった。

それから、ナミが遠慮がちにベルメールさんに抱き付いて喜んだ。

魚人による支配下だったけど、年を重ねて老けていくばかりのベルメールさんを見てられなくて、私とナミとで焦れたい二人を後押ししたのよね。



「終わったぞ」

全ての魚人達を海へと送り出したクロオビが再びシユヴァの元へやってきた。

「後はネズミの始末か。ま、アレを殺るのに武力は要らねえ」

「違うない」

「ネズミってあの海軍准将よね？」

「そうだな。ノジコも覚えとけよ。腐った権力者ほど質たちが悪いモノはない。アレはまだ小物だけど、最悪だろ？」

「否定は出来ないね。あんなのが海軍だなんて世も末だよ」

「まったくくだ。そういや、クロオビ。なんでナミの金を取り上げたんだ？　今更3億盗ったところで大した違いは無かっただろ？」

「金が目的ではない。ナミほど優れた測量士などそうはいない。アーロンさんは、いずれ魚人島に帰るお前の為にナミを手元に置いておきたかったのだ」

アーロンが誰かの為に何かをするなんてね……私にとつては意外な事実だけど、話すクロオビにも聞くシュヴァにも特別な感じは見られないから、これが一味にとつての普通なんでしょうね。

誰かを思いやる気持ちは、人間も魚人も変わらない。

今のシュヴァだつてそう。

アーロンの為に、アーロン一味の魚人の為に自分の身を海軍に差し出そうとしてい

る。  
その気持ちをもう少しだけ、私達にも向けてくれていれば……そう思わずにはいられないけど、それが出来ない理由があるつてシュヴァは言っている。

「馬鹿かよ……そんなやり方で手元に繋ぎ止めてもナミは俺に靡かない。でも、まあ、そういうことなら仕方ねーか。つてか、麦わら！」

「呼んだかあ？　……あれ？」

シユヴァが叫ぶとゴムの海賊が飛んできた。

今は麦わら帽子を被っているけど、さっきまでは被っていなかったハズ。

ベルメールさんが言っていた、麦わら帽子と関係がありそうだけど、シユヴァはどうしてこの海賊を麦わら呼んで呼んでいたんだろ？

判ってるつもりになってたけど、全然シユヴァの事を判ってなかった。

「お前、どうやってナミを口説いたんだよ？ ナミの海賊嫌いは筋金入りのハズだ」

「おれは別に何もしてないぞ。仲間に成って欲しいから、航海士になってくれて頼んだんだ」

「……っ!? あー……なるほど。そういや、俺は頼んでないな……。もし、俺が……いや、止めとくか。今更言っても詮無きことだ」

「ちちちちつ。話は済んだかね？」

タイミングを見計らっていたのか、嫌な笑みを浮かべた海軍准将がやって来た。

「なんだ？ 待ってたのか？」

「思い残しが無いよう話くらいはさせてやる。下手に暴れられても困るからな」

「気が利くじゃねーか」

「ちちちちつ。では、これをはめてもらおう。よもや貴様が魚人で、魚人の貴様が悪魔の力の持ち主だったとは思ってもよらなんだが、これさえ有れば恐るるにたりん。因果なも

のとは思わぬか？ 千人殺しよ」

海軍准将が手にした手錠をこれ見よがしにジャラジャラさせているけれど、あんなものでシユヴァをどうこうできるの？

アーロンが太い鎖で何重にも縛られていた事を思えば随分と貧相な手錠に見える。

「は……………？ あー、そうそう。俺ってビムビムの実のビーム人間だからナー」

あれ？ 嘘を吐いてる？

というより、シユヴァはさつき海に入っていたし、悪魔の実の能力者なんかじゃないわよね？

私も詳しく知らないけれど、悪魔の実の能力者って海に嫌われ溺れるから、ゴムの海賊を助けるのに苦労したのよ。

海軍は闘いの一部始終を見ていたとか言っていたのに誤認するのは、それだけシユヴァのびーむが衝撃的だったのかしら？

「おいつ、お前！ がっかりさせんなよっ!! 頑張ったらおれもビームが撃てる様になると思っただのにつ！」

ゴムの海賊も下手な嘘に騙されたみたいで、涙目になりながらシユヴァに詰め寄っている。

「酷い言い掛かりだな」

「悪魔の实の能力なら最初からそう言えよっ!」

「知るかよっ。つてか、最初から能力をバラすなんて阿呆のやることだぞ? まあ、いいや。じゃあな。未来の海賊王。お前が其くらいになつてくれなきや、負けたアーロンの立つ瀬がねえ」

ゴムの海賊はアーロンを倒した憎い相手のハズなのに、シユヴァはどこか楽しげに話すと手錠をはめて私達に背を向けた。

「そんなのおれが知るかつ。……んん?」

「待つてよ! アンタ、私からノジコを盗んでおいてこのまま何も言わずに行くつもり!」

「盗めてねーし、今はアーロンを選ぶ。俺にはまだ、アーロンとやらなきやいけないことが残つてるんだ」

「は? わけわかんない! 何言つてんのよ!」

「もう良いよ、ナミ。聞いてくれてスッキリしたよ。アーロンはね、シユヴァにとつて父親なんだつてさ。親を大切に思う気持ちなら私達にも判るだろ? 私より親を取る。

それだけの事なんだよ」

「そんなつ……!?!」

こうしてシユヴァは暴れる事なく、海軍船に連行されていった。



「なんだったんだ、アイツ？」

「千人殺しつすよ！ 知らねえんつすか?!」

「千人殺しつて言やあ、何年か前にクリーク海賊団を半壊させたつて野郎か」

「その千人殺しつすよ、コツクの兄貴。そこの姐さんが押さえてくれてなきや、どれだけの被害が出たことか。まさに紙一重で助かりやした」

シユヴァが去り、ゴムの海賊の仲間達が理解が出来ないモノを見たとばかりに好きな風に言っている。

「んんん？」

「ところで、ルフイ。お前はさつきから何で首を傾げてるんだ？」

ゴムの海賊が腕を組んで首を傾げていると、ウソツプが突っ込みを入れている。

「ナミがアイツにオレたちの事を話したのか？」

「えっ？ そんな暇なかつたし話してないわよ」

「おかしいなー？ なんておれが未来の海賊王とか知ってたんだ？ 海賊王にはなるけ

ど、おれはアイツの前で言つてねえ」

「そう言やあ、おれを追うのも早かったな」

「おれの名前も知ってたな」

「麦わら帽子を被ってないルフイの事を麦わらって呼んでたぞ」

「つて、言うか、思い出した！ 私は何年も前からアイツに麦わらの海賊に会ったか聞かれてたわよ!」

「ビームも撃つてたぞ」

「いや、それは今関係ねえっ!」

「にしししし。変な奴だったなあ。でも、気になるし今度会った時に聞いてみるか?」

「あんたねえ……シユヴァは投獄されるのよ!?! それに会うつて事は私達も投獄されるつてことよ。わかって言ってるの?」

「いやあ、そんなことねえさ。おれはまたアイツに会える気がするぞ」

「……どうしてよ?」

「ん????? 勘?」

「あんたねえ!」

キレているけど、どこか愉快なやりとり。

ナミが気に入るわけだ。

良かったね、ナミ。



アンタはやつと自分の居場所を見つけたんだよ。

私は、

私は……どうしよう？

「大丈夫つ。ノジコは私の自慢の娘なんだから」

「ベルメールさん？」

「シュヴァはね、今はアーロンを選ぶって言ったんだよ？」

「あつ……そうか」

今はアーロン。

じゃあ次は？

◇

アーロン一味が倒れ少しの時が流れた。

あれから崩れたアーロンパークから金品を探しだそうとしていた海軍准将は、どこからかの告発によつて海賊との癒着が暴かれ投獄された。

後を継いだ別の海軍もアーロンパークに残るハズの金品を探したけれど見つからない。

結局、金は使い切っていたと結論付けた海軍は、特に島の復興をやること無く帰っていった。

島の経済は悪くなった。

取り引き先が何処なのか判っていても、魚人が居ないと期日迄には運べない。

泣く泣くいくつもの契約を打ち切って、近場の取り引き先に絞って頑張っているけど、以前程の売上には届かない。

アーロン一味が金を出していた仕事は無くなり、職その物を失った人達も随分とい

る。貢ぎ金を払わなくて良くなった分だけ、いえそれ以上に収入が減った感じだけど、それでも皆は笑ってる。

シユヴァが言う通り、魚人の支配が嫌なだけだったのかもしれないし、そうじゃなく、支配のやり方が嫌だったのかもしれない。

私には、もう分からない。

ただ、島には平和が訪れた。

出産を控えたベルメールさんは、今は村の中心地の方で暮らしている。

アーロン一味を倒した麦わらのルフィは、あれから世間を騒がせている。

懸賞金は3000万から1億。

1億から3億へと跳ね上がり、それに合わせてナミの手配書も届いた。元気にやつてるって事だけど、海賊嫌いのあの子が賞金首になるなんてね。

そして、シュヴァ。

「あんたは一体、何やってんだか」

『マリルフォード頂上戦争』

『四皇・白ひげ死す！』

一面で大きく踊る文字。

幾度となく読んだ新聞紙。

私は紅茶を片手にそれを捲る。

『頂上戦争において最も多くの海兵を

殺めた海賊【海兵殺しのシュヴァ】

麦わらのルフィと共に監獄を抜け出

しマリルフォードに現れたこの男は

手当たり次第に海兵を殺める。

大将、黄猿に接敵すると狙いを定め

た様に執拗に攻撃を仕掛ける。

光速の攻撃を避け続けたこの男は、遂には大将・黄猿を殴り飛ばした。

殴り飛ばされた大将・黄猿は待ち構えていた「キリバチのアーロン」が手にした武器に依って重症を負う。

その後、乱入に次ぐ乱入で混沌と化した戦場から姿を消した。

元・七武海クロコダイルと共に姿を消したとの情報もあり、その残虐性戦闘力から注意が必要。

懸賞金・1200万↓

2億4000万ベリー  
』

『頂上戦争において大将・黄猿に重症を負わせた「キリバチのアーロン」  
麦わらのルフィと共に監獄を抜け出

しマリソフオードに現れたこの男は過去8年に渡って島を支配下に納めていた悪行をもつ。

大将・黄猿に重症を負わせた武器は特別製とされている。

乱入に次ぐ乱入で混沌とする戦場から元・七武海ジンベエと共に姿を消したとの情報があり、魚人島周辺海域の航行は更なる注意が必要。

懸賞金・2000万↓2億ベリー』

「ほんと……何やってるんだか……」

アイツの事だから何か理由があるんだと思いたいけど、海兵殺しつて一体どれだけ殺したらそうなるのよ？

それに、クロコダイルって確か、何処かの国を乗っ取ろうとしてルフィ君に倒された海賊よね？

アーロンじゃなく、そんな奴と一緒にいるなんて、今度は一体何を考えているんだか。

——コン、コンっ

——コン、コンっ

おかしいわね。

この島にノックを繰り返す様な人はいない。

手にした紅茶をテーブルに置いた私は、期待を込めて声をだす。

「はーい。空いてるわよー」

「邪魔をする」

そう言つてドアをくぐる大男。

「グランドラインの海賊が何の用？」

居丈高に言った私は、その男の首筋に抱き付いた。